

■ ユネスコ協会就学支援奨学金 奨学生インタビュー

子どもたちの夢が、未来をひらく

震災の年に始まったユネスコ協会就学支援奨学金事業は、この春で3年の節目を迎えました。家族とともに

※文中のお名前はすべて仮名です。また学年は2014年2月取材時のものです。

被災後の歳月を乗り越えてきた奨学生たちの3年間を振り返ります。



それぞれの夢を追いながら 高校進学を目指す

ユネスコ協会就学支援奨学生

山本 ユリさん・エリさん

中学2年生
宮城県気仙沼市

先の見えない日々に
奨学金が教育の明かりを灯した

双子の姉妹、山本ユリさんとエリさんは、震災が起こったとき小学5年生。高台にある学校にいて被災を免れましたが、その日のうちに家族とは連絡がとれず、学校で不安な一夜を明かしました。津波にのまれた後、火災で燃える気仙沼の街を、先生や友だちと一緒に見ていたといいます。

あれから3年。姉妹は中学2年生になりました。2人とも小学生の時はバスバンド部で活躍していましたが、いまはテニスの部活を頑張りながら、姉のユリさんは執行部(生徒会)にも参加し、副会長として活躍しています。一方、妹のエリさんは、好きな絵を描くことに夢中です。屈託のない笑顔のままに、のびのびと成長してきた2人ですが、母の尚子さんはこう振り返ります。

「震災当時は、4人の子どもと義父母を抱えて、生きるのに必死でした。そんな中、ユリ・エリを含めて3人の子に奨学金をいただくことができ、どれだけ助かったかわかりません。生活再建の先が見えない中、少なくとも、子どもたちの教育はなんとかかなりそうだと思えました」。

将来の夢は未知数
もっといろいろなことを勉強したい

震災では、自宅のほかに、父の信博さんが営む会社も津波で流されました。以来、ユリさんたち一家は、祖父母の家で生活しています。信博さんは仮設店舗で仕事を再開しながら、会社の再建に奔走中。パートで働く尚子さんも、休む暇なく頑張ってきました。そして3年が過ぎ、一時はまっ暗になった街に、ぽつぽつと明かりが灯り、少しずつ復興するようすを姉妹はずっと見てきました。

そんな2人が震災以来、心がけていることがあります。「道で会う人には笑顔であいさつしよう」というものです。当たり前のことですが、それが「街の復興のため自分たちにできること」だと思うからです。

震災1年目のころ、2人は「看護師など人に関わる仕事、人の役に立つ仕事に就きたい」(ユリさん)、「好きな絵を描く仕事がしたい」(エリさん)と、夢を語ってくれました。いまは、いろいろなことを勉強して、将来のことを決めたいと考えるようになったとか。そして、同じ高校への進学を目指し、はつらつと中学生生活をおくっています。



小学生のときから勉強するときはいつも一緒だ



中学ではテニス部に在籍している



2人はいま同じ高校を目指して頑張っている



自分で決めた夢に向かって
毎日を一生懸命生きる

ユネスコ協会就学支援奨学生

池田 明彦さん

高校2年生
宮城県気仙沼市

「進みたい道を行けばいい」と
背中を押してくれた両親

中学のときから陸上競技部だったという池田明彦さんは、走るのが大好き。いまは部活で毎日400mハードルを走っています。

明彦さんが被災したのは中学2年生のときでした。自宅とともに、両親の営む水産加工会社が被災し、その後の火災ですべて焼失。以来、不自由な仮設住宅での暮らしが続いています。しかし、そんな中でも両親は、いつも「自分の進みたい道を行けばいい」と、明彦さんの背中を押してくれました。

「何もかもなくて、親もすごく悩んでいたのに、ずっと支えてくれて心強いです」と明彦さん。そんな一家にとって、奨学金は少なからず支えになったといいます。

父の道明さんは、こう振り返ります。

「震災後しばらくは無職でしたし、その後一時、市の嘱託職員として働いていたときも収入は少なく、先の見通せない日々でした。だから奨学金には、経済的な面だけでなく、精神的にもずいぶん助けられました」。

目標は決まった
あとは自分が頑張るしかない

2014年春から、明彦さんは高校3年生に。大学受験を控えたいま、将来の目標を「放射線技師になる」と決めました。

「両親は、お金のことはあまり気にするな、といってくれています。進路は両親とも相談しましたが、自分で決めたことなので、あとは頑張るしかないです。もう受験する大学も決めました」と力強く話してくれました。

部活の締めくくりとして、いまは県大会目指してトレーニングに励み、その後、本格的な受験態勢となります。

「4畳半2間の仮設住宅で、暮らしも大変でしたが、思ったより早く時間が過ぎました。部活も勉強も頑張って、毎日とても充実していたから、この3年が早かったのだと思います」。

夢に向かって自分にできるのは「いまを一生懸命生きること」と語っていた明彦さん。そのひたむきさを胸に、いつも見守ってくれた両親に感謝しつつ、自分の道を踏み出そうとしています。



津波で流された家の跡地に立つ



夢に向かって前に進む



進路は決めた。「あとは自分が頑張るだけです」

被災地の子どもたちはいま

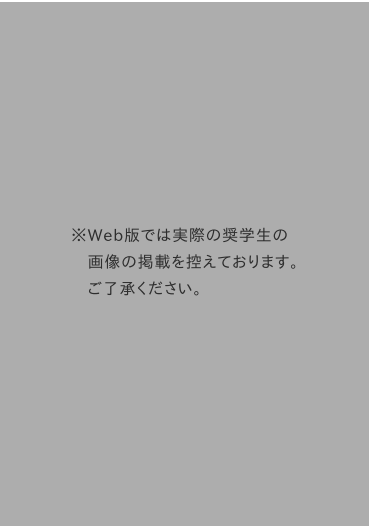
東日本大震災から4年が過ぎたいまも、被災地では不自由な暮らしが続いています。
そんな中、未来を見つめるユネスコ協会就学支援奨学金の奨学生たちの声を紹介します。

※文中のお名前はすべて仮名です。また、学年は2015年2月取材当時のものです。

高校でいろんなことを学びたい

宮城県山元町から仙台市内の高校に通うのは、川西ゆかりさん。得意な科目は体育で、とくにマット運動が好きな活発な女の子ですが、部活は茶道部を選びました。「何か新しいことをしたくて、茶道部にしました。練習のときは気持ちりが静まるし、お菓子が食べられて(笑)、友だちもできて楽しいです」
ゆかりさんの家は、海から1.5キロも離れた住宅地だったにもかかわらず、津波の被害を受けました。母の友江さんはこういます。「家は大規模半壊でしたが、なんとか修理して住んでいます。夫の会社が縮小になり、震災を機に転職したため、よそに移る余裕はありませんでした。それでも、ゆかりには高校だけは出させてあげたかった。だから、奨学金は本当に助かりました。ゆかりもいつか、何かの形でお返しできればと思います」
奨学金は、制服や自転車、定期など、入学の準備に役立てられたそうです。
山元町では、JR常磐線が津波で被災し、亘理駅から相馬駅までは代替バスとなりました。歩道も整備されておらず、歩

くのも自転車も危険です。そのため、友江さんは近くの高校に行ってほしいと思っていたましたが、ゆかりさんは列車通学となる仙台の高校を希望。見事、合格しました。卒業後は県内で就職するつもりです。そのためにも、いまは勉強に励んでいるといいます。そして、自分の住む町についてこう語ってくれました。「4年も経って、もう震災とか被災地とか、あんまり思わなくなりました。でも、人口が減って寂しくなった山元町には、早く鉄道が再開して、歩道もきちんと整備されて、人がいっぱい集まるような町になってほしいです」

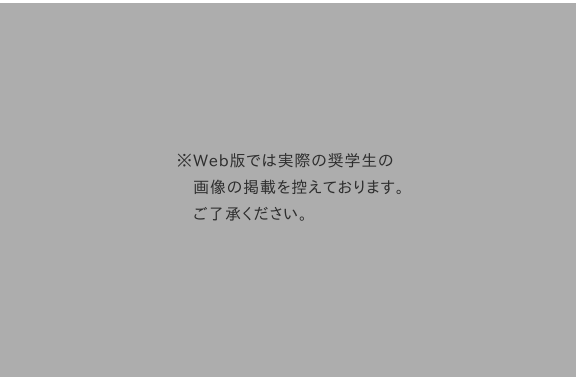


※Web版では実際の奨学生の画像の掲載を控えております。ご了承ください。

遠い夢に向かってチャレンジ

宮城県に住む山口市香さんは、いま充実した高校生活を送っています。
震災のときは小学6年生。家は流されなかったものの、津波で全壊したため、仕切りもない避難所で約1ヵ月過ごしました。やがて中学校に進学し、仮設住宅へ移ったある日、里香さんは突然、不登校になってしまいました。「ただ、ボツと学校に行きたくなくなりました。もともと小さいころから集団が苦手だったんです」
窮屈な仮設住宅の環境もよくなかったのでは、と母の路子さんは考えました。新築わずか1年1ヵ月で全壊した家には、ローンだけが残っています。仮設住宅を出るには、この家をなんとかするしかありませんでした。苦しい資金繰りの中から家をリフォームし、一家が仮設を出たのは1年後のことです。一時は高校にも行かないといっていた里香さんですが、県内の高校に入学すると、すすんで生徒会活動にも参加するようになりました。「なんとか変わろうと思って(笑)。生徒会では卒業文集を編集したり、先生の意外な一面がわかったりして楽しいです」
友だちもたくさんでき、アルバイトでは働くことの大変さを学びました。また、漢字検定にも挑戦。残念ながら試験には落

ちましたが、またチャレンジするつもりです。
震災後は路子さんもパートで働き始めましたが、経済的に大変だったので、奨学金を受給することになりました。「本当に助かっています。3年間いただけと知っているだけで、気持ちにも余裕が出てきました」
高校に入って、「少しは積極的になれたかなあ」という里香さん。いまはきちんと勉強して、高校を卒業することを目指しています。その先の夢もなんとなく描いているそうです。「最近すごく天体に興味が湧いてきました。あと、アニメが好きなので、アニメか天体、どちらかの仕事につけたらいいな。遠い夢ですけど、頑張ってみます!」

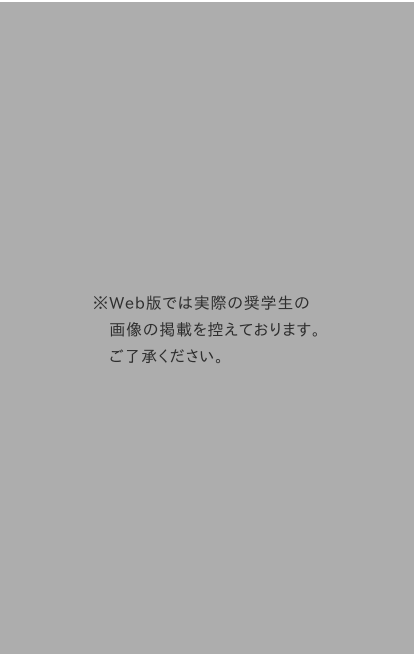


※Web版では実際の奨学生の画像の掲載を控えております。ご了承ください。

これからの未来を広げるために

福島県相馬市に住む中山絵里香さんは、AKB48とディズニーが大好きな高校1年生。震災以来、この場所にたどり着くまで、絵里香さんと母の美智代さんは何度も移動を繰り返してきました。
絵里香さんたちが住んでいたのは、双葉郡浪江町。東京電力福島第一原発から10キロ圏内に家があり、震災の翌日には、原発事故による避難命令が出ました。美智代さんはこういます。「避難するといっても、多分2、3日のことだと思ったんです。だから着の身着のままで家を出ました」
しかし、そのまま二人は、南相馬から相馬、山形…と転々とすることに。以来、父の良文さんの単身赴任が続いています。「最初は紙1枚、鉛筆1本ありませんでした。一組の布団に二人で寝るような生活。絵里香は、机代わりに段ボール箱をひっくり返して…。胸が痛みました」とはいえ当の絵里香さんは、中学入学のため相馬に移り住むと次第に明るくなっていきました。「私は人見知りだけど、中学でいろいろ話せる友だちができて、毎日がすごく楽しくなったんです。いまは相馬が大好きになりました」
そんな絵里香さんの夢は…。
「医師になりたいのですが、パソコンが好きなので事務系の仕事もいかなと(笑)。そのために国立

大学を目指します」
好きな科目は英語。
去年の夏休みは企業の支援でアメリカに留学しました。今年は、学校からイギリス留学を推薦してもらえそうですが、どちらの留学も奨学金が頼り、と美智代さんはいます。「アメリカ留学は無料でしたが、浪江の家からものを持ち出せないで、準備にお金がかかりました。イギリス留学にもお金がかかります。でも、できれば行かせてあげたい。奨学金は、長い目で見て絵里香の人生に役立つことに使えればと思っています」
新築だった浪江の家に戻ることは、もう叶いません。日々の生活費も切り詰める毎日で、奨学金は絵里香さんの未来を広げるために役立てられています。

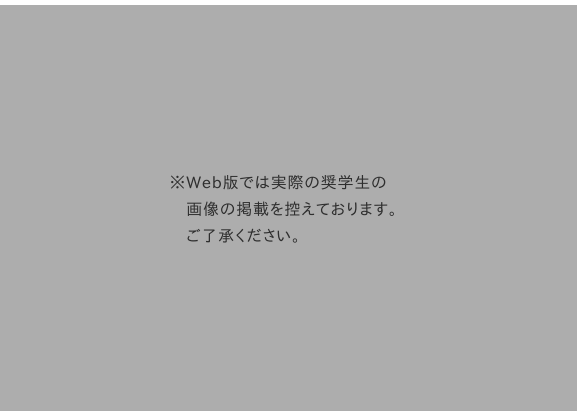


※Web版では実際の奨学生の画像の掲載を控えております。ご了承ください。

ぼくは、やっぱり福島がいい

福島県相馬市に住む高校生、佐藤智成さんのふるさととは、双葉郡浪江町の請戸(うけど)地区。東京電力福島第一原子力発電所から、わずか6キロの距離です。
両親ともに漁業協同組合関連の仕事をしていることもあり、幼いころから請戸港で獲れた新鮮な魚を食べて育ちました。父も母も請戸の出身で、地域全体が家族のようだったといいます。そんな平和な生活を一変させたのが、東日本大震災と原発事故でした。智成さんは当時、小学6年生。「海のそばにあった家は津波で流されて、次の日の朝、避難命令が出て、午後には原発が爆発。それからぼくらは、いろんなところで暮らしてきました」
3月末には、親戚を頼って千葉県成田市へ。故郷から遠く離れて、智成さんは次第に心のバランスを崩していきました。そして1年後、相馬市に部屋を見つけて再び福島へ。いま智成さんは「やっぱり福島がいい」といいます。請戸に住んでいた人たちは、ちりぢりになってしまったけれど、請戸時代の友だちとは、いまもたまに集まります。「そのつながりは、一生大事にしたいぼくの宝物です」
高校1年となった智成さん、部活では「放送局」に所属し、ドキュメンタリーやドラマの映像作品をつくっています。「震災で自分が体験し、実感したことをいつか作品にしたい。

いま皆で案を出しながら考えているところです」
作品をつくるだけでなく、将来は、震災での体験を活かせる防災関係の仕事にもつきたいと考えています。そしてもうひとつ、智成さんがなりたい職業があります。「両親が漁協関係者で、ぼくも生まれたときから港町にいたので、漁業に関連する道に進んでみたい」
いま請戸港は、母の幸子さんから漁協と漁業者たちの努力で、操業再開を目指しています。請戸は津波警戒区域のため、再び人が住むことはできませんが、港を再開することはできます。静かになった請戸の港に、たくさんの大漁旗がはためくこと。それは、請戸で生まれ育った智成さんの夢でもあるのです。



※Web版では実際の奨学生の画像の掲載を控えております。ご了承ください。

子どもたちはいま

Case 1

神楽で深まった地元への思い



部活はバレー部。毎朝、母がつくる弁当には、米2合分のご飯に、おにぎりもつけるとか。よく食べ、よく学び、よく運動する毎日だ

山本康太くんは、福島県南相馬市で生まれ育った。しかし、震災後、福島第一原子力発電所で事故が発生したため、着の身着のまま母、友恵さんの実家がある県内の新地町に避難。町に建設された仮設住宅に入居して、もう5年が過ぎた。

いまは新地町で元気に過ごす康太くんだが、小学5年で転校するときは、辛くて仕方がなくて泣いてしまったという。友恵さんは「転校したからといって、南相馬の友だちがゼロになるわけじゃない。いまの友だちにプラスして、新地の友だちができるんだよ」と一生懸命話して、やっと納得してもらったそうだ。

それからは、ひとりでバスと電車を乗り継いで南相馬の友だちの家に泊まりに行ったり、逆に向こうから仮設に泊まりに来てもらったり。そんな日々を過ごすうちに、康太くんは次第に新地町になじんでいった。

地元に伝わる神楽との出会い

そして、新地に来て1年目の秋、康太くんは素晴らしい郷土芸能と出会うことになる。福田地区の諏訪神社に江戸時代から伝わる福田十二神楽だ。
「友だちに誘われて初めて見にいったとき、カッコいいなあとと思いました」

自分も舞ってみたい、そう思った康太くん。しかし、参加資格である諏訪神社の氏子ではなかった。

福田十二神楽は、12人の氏子の長男が神楽師となり、子どもから子どもへと代々受け継がれてきた。ただ少子化の影響で、そのときのメンバーは7人。そこで、保存会などが相談して、康太くんを特例で受け入れてくれた。それから「百日道場」と呼ばれる厳しい練習を経て、見事、二十二代神楽師となった康太くん。以来、毎年春と秋の祭りで神楽を披露し、いつしか8人の神楽師の中で最年長となった。「練習は厳しかったけれど、舞っているときは楽しい。これからは、自分が皆を引っ張っていかなくてはと思っています」

福田十二神楽で神楽を舞えるのはあと2年、高校3年生までだ。そして、その後も後輩の指導にあたらなければならない。康太くんは、高校卒業後の人生をどんなふうに思い描いているのだろう。

「卒業したらエネルギー関係の仕事に就きたい。だから、高校では機械科を選びました。できれば新地にある火力発電所に就職したいです」

都会に出てみたい、という思いも少しはある。でも、地元の復興に携わりたい、そして神楽をしっかり伝えなければ、という気持ちがいまの康太くんを支えている。

「福島にいて、いやでも日々、原発のニュースが目に入ります。放射線は目に見えないし臭わないけれど、原発事故で逃げたときの怖さはいまも覚えています。そんな経験からも、原発に頼らないエネルギーを、という気持ちがあるのでは」と友恵さんはいます。

感謝の気持ちをつないでいく

一家がいま暮らしている仮設住宅は4畳半2間。身長181cmとなった康太くと両親の3人で暮らすには、決して十分な広さとはいえない。それでも、住めば都だったと友恵さんはいう。

「康太が反抗期のときでも、部屋が狭いから何も隠しようがない(笑)。その距離感が、家族にとってよかったのかもしれない。もちろん、隣近所の騒音とか小さなトラブルはありましたが、皆で声をかけ合ってなんとかやってこられました」

ただ、仮設に住めるのは今年度限り。今後は住まいの自立再建を目指していかなければならない。そんな中、就学支援奨学金は、高校進学の際の制服や体操服、学用品の購入費などに役立てられたという。

「奨学金をはじめ、これまでにたくさんの方から力をお借りしました」と友恵さん。

「皆さんには感謝の気持ちしかありません。康太には、その気持ちを次につなげられる大人になってほしいです」

康太くんはいま、神楽の継承を胸に、将来への夢を描いて充実した日々をおくる。「故郷はどこ?」との問いに、「自分の故郷は新地です」と迷いなく答えてくれた。



中学3年の秋祭りで「二本剣(にほんつるぎ)」を舞う康太くん

Case 2

夢はエレクトーンのリペアマン



高校になって勉強が難しくなった。「とくに数学と英語が苦手です…」

好きな授業は音楽と体育という沢田里佳子さん。中学のときから部活は吹奏楽部で、1年のときは打楽器、2年からはトロンボーンを吹いている。高校に入ってもやはり担当はトロンボーンだが、トランペットとかけもちすることもあったとか。いずれも音感とリズム感、そして体力のいる楽器だ。

「トロンボーンは、メロディを吹くときは楽しいけれど、裏打ちのリズムで吹くことがよくあって、それが難しいです。でも、部活は生徒も先生も和気あいあいとして、すごく仲よし。だから練習はいつも楽しいです。地区や県の音楽祭を目指して練習を重ねていますが、去年の夏のコンクールでは、いわき市で金賞を受賞しました」

今年も、夏のコンクールに向かって練習に励んでいる。

熊本支援で知った人の優しさ

吹奏楽部と同様に、里佳子さんが高校で頑張っていることがある。1年生の冬、自ら立候補し、当選して始まった生徒会活動だ。

「私の高校は、体育祭などの行事にひとり一人が真剣に取り組むことで、学校全体が盛り上がるという、とてもいい学校です。その裏方をやっているのが生徒会。だから私も、文化祭や体育祭のお手伝いができたらいいな、と思ったんです」

ほかにも、卒業式や入学式、クラス対抗の球技大会など、生徒会が企画して準備することはいろいろある。その活動の中で、今年は、熊本で発生した地震被災者のための街頭募金を行ったという。

「東日本大震災では、奨学金や支援物資などで、たくさんの方に助けていただきました。だから、今度は私たちが、熊本の人たちのために少しでもお役に立てれば、という気持ちで街頭に立ちました」

ショッピングモールの前で募金を呼びかけると、たくさんの方が立ち止まってくれたそうだ。募金だけでなく、「頑張ってるね」と声をかける人や、差し入れを持ってきてくれる人までいたとか。

「福島の人たちも被災しているから、被災者の気持ちが

わかるのかなあ、皆優しいなあ、と思って感動しました」

5年前の震災で、里佳子さんの家は半壊したものの、いまは修理して住んでいる。ただ、直後の原発事故で一時は栃木県に避難を余儀なくされた。母の佐知江さんの仕事が再開するのに合わせて、いわきに戻ってきたが、見えない放射線はもちろん、立て続く余震が怖かったのを覚えている。そんな思いも、熊本地震被災者への共感につながっているのだろう。

里佳子さんの生徒会の任期はあと半年。これからも、学校内外で幅広い活動をしていきたいと話してくれた。

楽器を修理する仕事がしたい

里佳子さんが通っている高校は私立なので、入学当時は家の経済を心配していたようだ、母の佐知江さんはいう。

「でも、就学支援奨学金が支給されることになって、少し安心したようです。それからは、毎日とても楽しそうに学校に通っています」

姉は東京の専門学校に通っているため、里佳子さんは佐知江さんとふたり暮らし。働く母のために、お風呂掃除などの家事も少しずつ手伝うようになった。

そして、高校2年生となったいま、将来なりたい職業はもう心に決めている。エレクトーンの修理をするリペアマンだ。「音楽が好きで、小さいころからずっとエレクトーンを習ってきました。演奏も楽しいけれど、私は、楽器を直すことに興味があるんです。以前、自分のエレクトーンをリペアマンの方が修理するのを見て、やってみたいと思ったのがきっかけです」

できれば地元いわきで、エレクトーンを習ってきた楽器店に就職したい。そして、楽器に囲まれながらリペアマンとして仕事をするのが夢だ。



トロンボーンは中学生のころから。「皆と演奏するのが楽しい」

沢田里佳子さん 福島県いわき市 高校2年生
※奨学生の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

山本康太くん 福島県新地町 高校1年生
※奨学生の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

子どもたちはいま

Case
3

スポーツで夢のステージに行く



好きな科目は体育と実習。「いい先生方に恵まれていると思います」

山本徹くんは、震災以来、仮設住宅で暮らしながら、実業系の高校の機械科に通っている。授業では、自分の手でものをつくる実習がとても楽しいという。「例えば、鋳込みをやったり、真鍮を削って文鎮をつくったりします。文鎮は、長い棒を切ってから形をつくっていきます。7cmくらいの文鎮がひとつ出来上がるのに、計21時間、7週間もかかるんですよ」

震災前まで、父の明さんは工場を営んでおり、徹くんも、小さいころから機械や重機を間近に見て育った。だから、いまの高校を選んだのは自然だし、学んでいることがいつか仕事に生かせればと考えている。また、重機の操縦にも憧れがあり、いつか重機の免許を取ってみたいという。

ただ、徹くんが本当にやりたいことは、別にある。

スポーツに関わって生きていきたい

「小さいころから走るのが好きで、かけっこはいつも1番。自分でもどうして速いのかわかりません(笑)。中学には陸上部がなくて、サッカーをやっていたのですが、高校に入ったら絶対、陸上がやりたかった。いまは念願の陸上部で100mと200mを走っています」

練習は、毎日の放課後と土曜日の午前中。テスト期間以外はほとんど陸上漬けの毎日だが、徹くんは楽しくて仕方がないという。

「春から夏にかけては大会がいくつもあるから、タイムを伸ばす目標がいっぱいできて、わくわくします。走るだけでなく、スポーツは何でも大好き。だから、将来、何らかの形でスポーツに関わって生きていきたいです」

いまの目標は、インターハイ出場。さらに、全日本ユースという大きな大会も控えている。その先は、できれば大学に進学して陸上を続けたい。そして、スポーツインストラクターの仕事をやりたい。それが、徹くんの本当の夢だ。

ただ、徹くんの家族は、震災5年目にしようやく高台の移転先が決まったばかりだ。これから家を新築

するための費用が必要になってくる。それは、被災した一家にとって並大抵の負担ではないはずだ。

「でも、まだ諦めてはいません。部活でいい成績が出せれば、学費が免除されるかもしれないし、道はいろいろあると思うので、夢のステージに行けるよう頑張ります!」

大好きな地元を
自分の手で復興したい

海の近くにあった自宅も、明さんの工場も、津波ですべて流されてしまった。けれども、徹くんは生まれ育ったこの土地が大好きだという。

「どんな仕事に就くにしても、できれば地元で就職したい。ここは山があって川があって、目の前に海がある。静かだし、鹿とかタヌキとか動物もたまに見かけます。そんな自然豊かな地元を、自分の手でなんとか復興したい。そして、大船渡だけでなく、岩手県全体がスポーツで元気になったらいいと思います。そのときに、僕もスポーツに関わっていられたい」

震災後、学校で将来の町をどうするか授業で話し合うたびに、どんな形でもいいから地元の力になりたいと思ってきたそうだ。家や店はぼつぼつ建ってきたし、交通機関も整ってはきたけれど、大船渡の復興はまだまだこれからだという。だからこそ、地元への思いには熱がこもる。

小学5年で被災した徹さんにとって、震災はまだ心の隅にしっかりと残っている。皆で山に避難したときの風景も、支給品が届かなくて食事に困ったことも、はっきりと覚えている。とくに忘れられないのは、地元の消防団の人たちが、一生懸命、自分たちの世話をしてくれたことだ。

「地元で就職したら、ぼくもぜひ消防団に入って、今度は自分が人を助けられるようにになりたいです」



「大船渡が好き。地元の復興に役立ちたいです」

Case
4

子どものころからの夢に向かって

大友琉聖くん 福島県いわき市 高等専門学校2年生
※学年は取材当時のものです。



「学校では、『こんな実験がしたい』といえば先生たちも協力してくれるし、すごく充実しています」

「薬」の開発をする研究者になりたい」大友琉聖くんが描く将来の夢だ。その夢に向かって、いまは物質工学科で生物学を学んでいる。幼いころ父を病気で亡くした経験が原点となった。

父の孝さんが体調を崩したのは、琉聖くんが5歳のとき。誤診により誤った薬を処方されたため、一時は命の危険にさらされた。その際に悪性リンパ腫と判明し、適正な治療が始まったものの、4年の闘病を経て亡くなったという。琉聖くんは小学3年生になっていた。「父のことが心残りです…。それで、自分の力で薬を開発したいと思うようになりました。母には苦勞をかけたし、ちゃんと社会の役に立てるように頑張っていきたいです」

琉聖くんには2歳下の弟がいる。二人の息子を抱えて、病気の夫の介護をしながら働く母の姿を、琉聖くんはしっかりと心に刻んできた。

原発事故で避難した東京で

東日本大震災が発生したのは、孝さんが亡くなってわずか2年後のことだった。母の綾子さんは振り返る。「ようやく、気持ちも生活も立ち直りかけていたのに…。地震だけでなく、原発が爆発したので、とにかく子どもたちが心配でした」

福島第一原子力発電所の事故後すぐに、琉聖くんは弟と二人だけで東京の知り合いの家に避難。2ヵ月間だったが、東京の学校で学んだ。「別の場所に避難した友だちからは、『放射能がうつる』といじめられたと聞いていたので、最初は心配でした。でも、僕が通った学校は皆親切で、友だちもいっぱいできました。いまでも手紙や電話でつながっています」

おじいちゃんのお米

東京では、滞在先の家族も親切にしてくれ、恵まれた環境で避難生活をおくった琉聖くん。そんな中、ひとつだけ心に引っかかることがあった。

「お米の味が、家で食べているものと全然違ったんです」

家では、幼いころからずっと祖父がつくった米を食べていた。よその米を食べて初めて、琉聖くんは、祖父の米がどれだけおいしかったという。

「当たり前だと思っていることは、決して当たり前ではないんだ。大切にしていかなければならないんだ。それを、父の死と震災と、その後の原発事故で知りました」

原発事故後の風評被害によって、祖父の米は以前より売れなくなってしまった。それでも、土を入れ替え、農協で放射線検査を受けながら、いまも誇りを持って米づくりを続けているという。

「風評被害はどうしようもないです。だけど、『おいしいといってくれる人がある限り、おれは米をつくり続ける』というおじいちゃんは、すごくかっこよくて、尊敬しています」

綾子さんも、福島への思いは深い。「福島はすごくいいところで、農家の方々もおいしいものをいっぱいつくっています。今後は琉聖たちが復興への架け橋となって、『僕は福島出身です』と堂々といえる世の中になってほしいです」

いまはロボットに夢中

苦しい家計をやりくりして琉聖くんを高専に通わせているのは、「財産は残せないけれど、教育は残る」という綾子さんの思いからだ。夢に向かって、常に新しいことに挑戦したいという琉聖くん。授業のほかにも、いま夢中になっていることがある。部活のロボット研究会だ。琉聖くんが通う高専は、なんと3年連続で高専ロボコン（「アイデア対決・全国高等専門学校ロボットコンテスト」の略）の全国大会に出場している強豪校なのだ。「僕は電気班にいて、ロボットを動かす回路をつくっています。一個一個の部品について学び、動く仕組みを理解してロボットをつくり、それが自分の操縦で動くのがすごく楽しいです」

ロボットを動かす技術や仕組みは、生物の実験作業にも役立てたいという。いまは秋の大会に向けて、皆でアイデアを出し合っているところ。目指すのは、「もちろん優勝です!」と目を輝かせた。



ロボット研究会の仲間たちと(左から2人目が琉聖くん)

※文中の保護者の名前は仮名です。

山本徹くん 岩手県大船渡市 高校1年生
※奨学生の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

子どもたちはいま

Case 5

そろばんで10段をとりた



趣味はそろばんと読書。
「ミステリーとか友情ものとか、いろんなジャンルを読んでいます」

長 沢ほのかさんは、5人姉弟のいちばん上。下の弟ふたりは震災後に生まれたので、いま3歳と1歳。まだまだ手のかかる年ごろだ。だから、仕事で忙しい母の望美さんを助けて、家ではほのかさんが「小さいママ」として頑張っているという。

放課後のほのかさんの行動は、だいたいこんな感じだ。

「7時まで部活でテニスの練習をして、それから9時までそろばん教室。家に帰ってからは、洗濯物をたたんだり、お風呂を洗ったりして、小さい弟たちをお風呂に入れます。私が勉強を始めるのは、ご飯を食べて、お風呂に入ってからです」

慌ただしい毎日だが、どれも大切なことばかり。中学から続けているテニスも楽しくて、土日の練習も苦にならないという。それに、ほのかさんにとって、いちばん大事なのは家族なのだ。

「母は保険の外交をやっているので、震災後はとくに仕事が忙しくなりました。毎日、結構疲れていると思うから、手伝いをするのはいやではないです。後から母がほめてくれるのが嬉しいし(笑)。」

ライフワークはそろばん

震災以来暮らしている仮設住宅は、下の弟たちが生まれてからなおさら賑やかになり、狭さも気にならない。寝るときには、親子仲よくずらりと並んで寝るそう。家族っていいなと思う。たまに、そろばん教室でひとりになることがあるけれど、そんなときは、早く賑やかな家に帰りたいなと思います」

そろばんは小学1年生のときに始めて、なんと珠算と暗算では9段の腕前だという。中学に入り、勉強や部活との両立が難しくなったときは、やめたいと思うこともあったとか。それでも粘り強く続けてきて、中学3年のときには、読み上げ算の部で日本一となった。成績がよいのでいろいろな大会への遠征も多く、ほのかさんにとって、そろばんはいま大事なライフワークとなっている。「いちばんの目標は、珠算と暗算で最高段位の10段を

とること。検定前には、毎日のように教室に通っています。10段を持っている人は、東北にも数えるほどしかいませんが、高校を卒業するまでにとれるよう頑張ります」

母の笑顔に支えられて

そろばんの成果もあって、得意な学科も好きな学科も数学だ。それを生かして、大学に入って経済学を勉強し、金融関係の仕事に就きたいという夢を持っている。そろばん教室の先輩が銀行に就職したので、刺激を受けた部分もあるそう。そんなほのかさんを、いつもものびのびと応援してきたのが望美さんだ。

「うちは子どもがいっぱいいるので、決して楽な暮らしではないけれど、本人が希望するなら大学にも行かせてあげたい。『大学に行っていいいの?』と遠慮していた時期もありましたが、気にしなくていいといいました。奨学金は、高校進学のための費用や、学費にも使わせていただき、おかげさまで本当に助かっています」

ほのかさんは、家族を明るく照らしてくれる望美さんの笑顔が大好き。

「そろばんとか、勉強とか、将来のことを考えて頑張るから、母にはずっと支えていてほしい」とはかんだ。

「震災後の5年間で、ほのかは友だち思いになったし、自分よりも相手のことを優先して考えるようになりました」と望美さん。幼い弟たちの面倒を見ながら、部活やそろばん、受験勉強を頑張る日々。そんな中、学校でいちばん楽しい時間は、お昼に望美さんお手製の弁当を食べるときだそうです。

「ご飯に海苔で顔を描いたりして、母が毎朝、可愛い“キャラ弁”をつくってくれるんです。それを友だちと一緒に食べるのが、いちばん楽しいです」



いま使っているそろばんは母のお下がり。「大事に使っています」

Case 6

機械と柔道の2本柱でいきます！



「ぼくの地元はいまも浪江。浪江で生まれたことに誇りを持っています」

自 動車、中でも「国産の乗用車が大好き」という長友明宏くん。自動車の部品やエンジンをつくる仕事に就きたいと、工業高校の機械科で学んでいる。

「とにかく、ものをつくるのが好きで、授業では実習がいちばん面白いです。エンジンを分解して、それを組み立て直すという授業がこれからあるのですが、いまから楽しみです」と目を輝かせる。苦手なのは数学だが、自動車関係の仕事に必要なので、懸命に勉強しているそう。

いまははつらつと学校生活をおくる明宏くんが、震災後は生活が落ち着かず、辛い思いに沈むこともあった。

浪江から二本松、そしていわきへ

明宏くんが生まれ育ったのは、福島第一原子力発電所に近い福島県浪江町。父の忠勝さんは、震災直後の緊迫した状況を振り返った。

「12日に『原発が爆発しそう』といわれ、ありったけの米を炊いておにぎりにして、家族で町内の津島へ逃げたんです。誘導する人たちが皆、防護マスクをつけていたので『おかしいな』と思っていたら、1号機どころか、その後2号機も3号機も爆発してしまった…」

30年近く原発関連の仕事をしてきた忠勝さんには、信じられないことだった。しかし、津島も危ないといわれ、3月15日には二本松市へ。借り上げ住宅が見つかるまで、体育館で1ヵ月近くを過ごした。4月から小学5年生となった明宏くんは、体育館から二本松市の小学校へ通うこととなった。

「それでも、学校に行けるのが嬉しかったのでしょう。息子はニコニコしていました」と忠勝さん。

事故後、原発から仕事の要請はなくなり、忠勝さんはいわきに通って細々と日々の仕事をしていた。自宅は放射線に汚染されていて、もう帰れない。いわきへの移住を決めたとき、明宏くんは6年生になっていた。

心の支えになった柔道

「仲よしだった浪江の友だちはばらばらになり、二本松でやっと友だちができたのに、また転校!? という感じで、もう気持ちがついていきませんでした」と明宏くん。

しばらくして、転校先の学校の先生から忠勝さんのも

とに電話が入った。授業中、明宏くんがぼんやり空ばかり眺めているというのだ。そこで、忠勝さんは、明宏くんを車に乗せて二本松まで連れて行った。

「息子は車の中でぼろぼろ泣いていました。それで、『お前はもう6年生になったんだから、一人で電車にもバスにも乗れるだろう? いわきから二本松はこんなに近いんだよ。来なくなったらいつでも二本松に来て』といったら、やっと納得してくれました」

その後、二本松の友だちと行き来しながら、いわきでも少しずつ友だちができていった明宏くん。その心の支えとなったのが、柔道だった。小学2年で始めた柔道は初段、黒帯を締めるようになった。震災で一時、中断していたものの、中学校の部活で再び始めることにしたのだ。

「柔道で体を動かすと、寂しいときも元気が出ました。高校に入っても、やっぱり柔道は続けています」

これからも、大好きな機械の勉強と柔道の2本柱でやっていきたい、と話してくれた。

父の代わりに夢をつかむ

いわきで知人に紹介され、コンビニを始めた忠勝さん夫婦。だが、商売の経験がないため、利益を出すのは容易ではないそう。

「生活が安定せず、息子たちには辛い思いをさせていますが、60を過ぎた体にはきつくて…。コンビニをやめて、除染の仕事に行こうかとも考えますが、将来が見えないのがいちばん辛い。こんな状態なので、奨学金はありがたくて本当に助かっています。学生服や柔道着もすべて奨学金で揃えてあげることができました」

そんな父への思いを、明宏くんはこう語ってくれた。「おやじも年なので、無理だけはしてほしくない。だから、自分が頑張って夢をつかもうと思っています」



辛いときも柔道に支えられた。
高校になって新調した柔道着に黒帯を締めて



「就職したい病院に看護学校があるので、そこに入るのを目指しています」

避難所で 憧れた看護師 になりたい

山本咲良さん

福島県福島市 高校2年生

※奨学生やご家族の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

震災があったとき、山本咲良さんは福島県双葉郡浪江町に住む小学4年生。直後に福島第一原子力発電所が爆発したため、自宅から避難した後、咲良さんの家族はなかなか落ち着くことができませんでした。町内を転々としてから葛尾村、郡山市、いわき市、そして栃木の避難所へ。咲良さんは、そこでようやく小学校に通うことになったのですが、入学3日目で猪苗代町に移動します。そこもわずか3ヵ月で、福島市内の仮設住宅に移りました。「慣れると移動、という繰り返しでした。栃木の小学校では、ランドセルをはじめ、学校側でいろいろと揃えてくれました。でも3日間しか通えなかった。友だちもすぐできたのに…。お別れするとき、私は浪江の住所しか知らなかったから、皆その場で手紙を書いて渡してくれました」

勉強も部活も、一步一步

福島市では、仮設住宅からやがて復興住宅へ。中学に引き続き、部活はバドミントン部です。「仮設から遠く、送迎バスの時間が決まっていた中学と違って、部活が終わっても自主練習できるから充実しています。部活の友だちとは、自転車でお花見に行ったり、いろんなところへ出かけるのがすごく楽しい」

勉強でがんばっているのは、数学や化学などの理系。将来は看護師を目指しているからです。「震災で避難所にいるとき、看護師さんがあちこち走り回って活躍していて、すごくかっこいいな、自分もあいうふうになりたいなと思ったんです」

一家の大黒柱である母の貴美子さんは、原発事故により職を失い、その後のストレスで体調を崩しました。復職もままならず、厳しい状況は続きますが、咲良さんを応援する気持ちは変わらないといいます。

「いままで我慢ばかりだったので、本人のやりたいことをやらせてあげたいです。目標を持って、焦らず、一步一步進んでくれればいい。それは、私も同じですね」

就学支援奨学金の受給が決まったときは、咲良さんのために、真っ先に電子辞書を買ってあげたとか。ほかに制服

服から教科書、通学の電車賃、部活のユニフォームまで、奨学金は大いに活用されているそうです。

思い出はキラキラと輝いて

咲良さんは15歳のとき、震災以来、戻ることのなかった浪江町の家を見に行きました。しかし、緑豊かだった浪江は、木が伐り倒され、除染物を入れた黒い袋が積み重ねられ、色のない世界が衝撃的だったといいます。「放射線量が高く、家にあったぬいぐるみや教科書など、大事にしていたものは全部捨てるしかありませんでした。ただ、思い出のものはなくなっても、友だちと遊んでいた記憶はキラキラ輝いていて、いまでも鮮明に残っています」

貴美子さんの出身地は、浪江の南に位置する富岡町。いずれも原発事故によって住民が避難を余儀なくされた地域ですが、春は山菜採り、夏は鮎釣り、海も近くて、素晴らしいところだったといいます。

咲良さんも小さい頃から、浪江や富岡の豊かな自然の中でのびのび育ちました。その大切な思い出を胸に、目標が定まったいま、これから先の未来を見つめています。

「看護師を目指す前の夢は花屋さん。
お花が好きな母にプレゼントしたいと思っていました」



弓道のインターハイで、優勝を目指します

坂本真美さん

宮城県多賀城市 高校2年生

※奨学生やご家族の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。



「弓道の大会前など緊張しているときには、大好きな Greeen の曲を聴いています」



りりしいはかま姿。弓道具やはかまは、使い慣れた中学のときのものを使っている。
写真中央が真美さん

多賀城市の高校2年生、坂本真美さんは弓道女子です。高校は、弓道が強いという理由で選びました。弓道を始めたのは中学からだそうです。

「仲のいい先輩が中学で弓道部に入って、楽しそうな話を聞いていたので、自分も入ろうと思いました。それに、はかま姿がかっこよかったから(笑)」

高校では毎日、放課後に厳しい練習が続きます。土曜日も練習、大会が近くなると日曜日や朝練もあるといいます。もちろん夏休みも毎日。なぜそんなにがんばるのか、弓道の魅力を聞いてみました。

「弓道はアーチェリーと違って、的に当たりさえすれば、的のどこに当ててもいいんです。それよりも、弓を引いている姿や型の美しさ、きちんとした態度が評価の対象になります。まさに武道。かっこいいと思います」

今年のインターハイは地元、宮城県で開催されるため、いっそう熱が入っています。真美さんは5月の予選会で個人戦への出場権を得、団体メンバーにも選ばれました。「インターハイでは優勝したい。個人戦でも団体戦でもがんばります」

復興したところと、まだのところ

震災が起きたのは、真美さんが小学4年生のときでした。母の琴美さんが車で学校に迎えに来てくれ、弟妹たちといったんは自宅へ。避難するために、布団や教科書、着替えなどを車に積み込んで走り出した瞬間、津波が近づいてくのが見えたそうです。あわてて車から降り、アパート2階の自宅に駆け上がりました。

「車が流されていくのが窓から見えて…。すぐ下の妹は4月から小学1年生だったのですが、新しいランドセルは車に積んだまま。ああ～、と思ったのを覚えています」

海の方ではガスタンクが爆発して炎上。夜は停電で真っ暗な中、窓だけが炎を反射して赤々と光っていたそうです。それでも6年が経ち、随分と復興が進んだといいます。

「家の近くにグラウンドがあって、流された車やガレキがいっぱい積み上げてありました。それがいまはなくなって、復興住宅になりました」

ただ、真美さんが通った中学校は校庭が広いため、仮設住宅が建てられました。そこに、いままも住まざるを得ない人たちがいるのも事実です。

「もう6年も経つので、その人たちが早く落ち着いたところに住めるといいなあと思います」

小さい子どもに関わる仕事をしたい

弓道の練習に一生懸命の真美さんですが、授業では保育の勉強に力を入れているとか。将来は、小さい子どもに関わる仕事に就きたいのだそうです。

「私は4人兄弟のいちばん上で、下の子たちの面倒を見るのが好きでした。いちばん下の妹はまだ3歳半なので、一緒にお風呂に入るし、着替えの手伝いなどもします」

震災時、小学校入学前だったすぐ下の妹は、もう中学生。真美さんの背中を追って、弓道部に入部しました。いまはその妹にも弓道を教えながら、保育の仕事にも夢を抱いてがんばっています。



「高校は自由な校風。文化祭も自分たちで企画を立てて、クラスで団結できたのが楽しかった」

いまが充実！ 放送委員会で 夢に向かう

安藤由美さん

福島県いわき市 高校2年生

※奨学生の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

福島県いわき市の高校2年生、安藤由美さんが、いま熱心に取り組んでいるのは放送委員会の活動です。いつか自分でドキュメント作品をつくってみたい。そう思って、活動に参加しました。「NHK杯 全国高校放送コンテスト(Nコン)」を目指して、放課後は月曜から金曜まで毎日、さらに土日にも作業をすることがあるといいます。

「自分が興味のあることだから、忙しくても充実しています。私はNコンで研究発表をするため、機材の扱いや発声の仕方など、テーマを見つけて研究しています」

ほかに、インタビューの手伝いをしたり、ドラマづくりのロケを手伝ったりと、委員会では幅広く活動しています。Nコンの地区大会は5月、県大会は6月、そして全国大会は7月に開催。由美さんの高校は、過去に何度も優勝歴のある強豪校なだけに、今年も力の入った発表が期待できそうです。

ようやく落ち着いた家族の暮らし

震災時、由美さんは福島県双葉郡大熊町の小学4年生でした。福島第一原発の事故により、地元で仕事のあった父を残し、家族で東京へ避難。そこから、母の実家がある福岡へと避難先を変えます。福岡の小学校で1年間過ごし、家族とともにいわき市へやってきたとき、由美さんは小学6年生になっていました。

「私は人見知りなのですが、福岡でもいわきに来たときも、周りの人たちに明るく受け入れてもらえてよかったです。いわきでは、父とまた一緒に暮らしが始まり、仲よしの友だちもできて、やっと落ち着いたという感じです」

とはいえ、震災以来、まだ一度も帰ったことのない大熊町を、忘れたわけではないといいます。

「この前、大熊町について調べていたら、小学校の内部のようすがインターネットで見られるようになっていました。ちょうど帰りのホームルームのときに地震が起きたので、避難するときに投げ出したカバンとか、壁に貼ってあった自分の絵とかが、360度見られるんです。ボロボロになっていたけれど、懐かしかった。やっぱりふるさとなんだなあと思います」

地震が起きたことで、いまの自分がある

昨年の夏休みには、復興支援の一環として、アメリカで3週間、留学体験をすることができました。

「アメリカでは、若いリーダーたちの体験談がすごく刺激になりました。また、高校生活では就学支援奨学金のお世話になっており、地震がなければ福岡の友だちとも出会うことはありませんでした。地震が起きたことで、いろいろな人たちに支えていただいた。そのおかげでいまの自分があるんだと思うと、不思議な気持ちになります」

地震も自分のひとつの糧にしたいと語る由美さん。将来はマスメディアの仕事に就きたいと夢を語ってくれました。そのためにも放送委員会の活動をがんばり、英語の部活も続けながら、学校生活を満喫しています。

「目指している仕事で直接、誰かの支援ができるわけではないけれど、大人になったら、ボランティア活動などで、なにかしら社会に恩返しをしたいです」

「いつかは映像でドキュメント作品をつくってみたいです」



勉強も部活も 逃げずに がんばりたい

友坂悠里くん

福島県いわき市 高校2年生

※奨学生の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。



「勉強と部活の両立は大変ですが、朝早く起きるのにも慣れました」



真剣な表情でティンパニを叩く悠里くん。今年5月の定期演奏会で

友坂悠里くんのふるさは福島県双葉郡富岡町。震災後に福島第一原発が爆発したため、家族とともに、会津、山形県米沢市を経て、小学5年生のとき東京都の奥多摩町でしばらく暮らしました。悠里くんは、その奥多摩での1年間が本当に楽しかったといいます。

「全校生徒合わせても100人くらいの小さな学校で、被災地から数人の子と一緒に避難していました。最初は不安でしたが、先生もクラスの子も親切にしてくれて、学校が終わると校庭や神社で遊んだし、雪遊びも楽しかった」

ある日、学校にいるとき地震があり、悠里くんは震災を思い出して動揺しました。そんな自分には誰も気づかないだろう。そう思っていたら、帰り道に友だちが「大丈夫だった?」と気遣ってくれたのです。そのときの嬉しさは、いまも悠里くんの胸に深く残っているといいます。

避難所を引き払うとき、お別れ会が開かれ、避難してきた子ひとりひとりにメッセージが渡されました。それまでの人生で、いちばん泣いたという悠里くん。

「そのメッセージはいまも部屋に飾ってあって、僕の宝物です」

始発で学校へ行き、終電で帰る日々

奥多摩から、父の仕事の関係で大分へ。そして悠里くんが中学1年生のとき、福島県いわき市へ来ました。高校2年生になったいまは、勉強をとてもがんばっていて、朝は5時半に起きて始発電車で高校へ行き、ホームルームが始まるまでの1時間、友だちと勉強をしています。また放課後は、部活が終わってから市の施設へ行き、22時3分発の終電に間に合うまで勉強しているそうです。

「中学校のときの社会科見学で国の仕事に興味がわきました。希望の大学へ入り、国家公務員になって、教育で社会を変えたいと思っています」

得意な学科は英語と数学。苦手なのは国語の現代文ですが、担任でもある国語の先生から勉強の仕方を教えてもらい、いまは少し理解が進んだそうです。

大好きな吹奏楽部でティンパニを叩く

悠里くんが勉強と同じくらいがんばっているのが、吹奏楽部での活動です。

「僕の高校は、10数回も全国大会に連続出場している強豪校。だから練習は大変ですが、先輩方は皆、優しくて雰囲気がいい。とても楽しいです」

夏のコンクールは7月の支部大会から。2年生の今年は、悠里くんも大会で演奏します。楽器は、小学生のときに始めたティンパニ。

「ティンパニは曲のクライマックスで目立つことが多くて、それはプレッシャーですけど、やり遂げたときは達成感があります」

先輩がしてくれたように、自分も高校を卒業したら、母校で後輩たちの手伝いがしたいといいます。

「勉強も部活も3年間、逃げずにがんばりたい。震災後、奥多摩や大分、いわきでいろんな出会いがあって、その人たちとのつながりが僕をつくってきました。そういう恵みを、これからも生かしていきたいです」



鉄道が再開されず、高校まではBRT(代行バス)で30分かかる。
奨学金はその通学費や教科書代などに活用されている

新しい町を 見つめて 未来を描く

川本聡子さん

岩手県陸前高田市 高校1年生

※奨学生やご家族の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

「好きな作曲家はショパンとドビュッシー」という川本聡子さんは、陸前高田市の高校1年生。小学1年生のときに始めたピアノが趣味だそうです。しばらくやめていた時期がありました。

陸前高田市は広大な市街地が津波に襲われ、1本だけ残った「奇跡の1本松」で知られます。以前は海の近くに住んでいた聡子さんの家族は、「ここは津波の心配があるから」という祖父母の意見に従い、わざわざ山の方に家を建てたとか。震災が起きたのは、その5年後のことでした。安全だと思っていた新築の家は、ローンだけ残して津波で全壊。大事にしていたピアノも流されてしまったのです。「震災があったのは、ピアノを習い始めて3年くらいのころ。どこかに流れ着いていないかと、母と方々探したのですが、見つかりませんでした」

家の再建など生活も大変な中、両親が中古のピアノを買ってくれたのは、震災から4年後のことでした。

家族皆が元気でいられるように

聡子さんの家族は、両親と兄、妹、そして祖父母という構成。母の由紀恵さんは、震災後をこう振り返ります。「うちは共働きなのですぐには家に戻れず、おばあちゃんが子ども3人を連れて逃げてくれました。津波はこないからと、そのまま家にいたら皆ダメだったと思います」

その後は親戚の家で寝泊りをし、やがて近くの空き家を借りて住み始めました。高齢の祖父母が一緒なので、仮設住宅での暮らしは難しいと判断したからです。

「でも、借りていた家は古くてとても寒く、おじいちゃんとおばあちゃんが体調を崩すのでは、と心配になりました。それで、家のローンはまだ残っていたのですが、もういちど、さらに山側に家を建てることにしたのです」

震災から6年。被災した家のローンはようやく払い終えたものの、いままた新しい家のローンを抱えています。

陸前高田の町はいちどなくなりましたが、まさにゼロから、新しい町が生まれつつあります。聡子さんの家族も、再びこの町に根を下ろそうとしています。

忙しくても充実した日々

聡子さんの通う高校は進学校。授業のスピードが早くて大変だといいますが、英語と社会が得意だそうです。

「中学時代の英語の先生は授業が面白く、海外の話などいろいろしてくれて、それで英語が好きになりました」

将来のことはまだわからないけれど、英語を生かして海外と関わる仕事にも憧れているとか。一方、部活では陸上部のマネージャーとしてがんばっています。

「大会になると試合が何日もあって大変ですが、いろんな競技が見られて楽しいです。応援も一生懸命しています」

放課後だけでなく土日も部活があり、グラウンドの掃除をしたり、タイムを計ったり、記録をつけたりと忙しい毎日。そんな中、いちばん楽しい時間は、由紀恵さんがつくってくれたお弁当を友だちと食べるときだそうです。

家族で支え合い、震災後はいろいろな支援にも支えられました。そんな聡子さんにはやってみたいことがあります。「ボランティアで高齢者の施設や保育園などに行って、人のお手伝いをしたいと思っています」

「読書が好き。『世界から猫が消えたなら』や『氷菓』など、映画化やアニメ化された本も面白かったです」



ずっと野球が 好きだから、 夢は甲子園

中山美里さん・舞さん・翔くん

宮城県気仙沼市 高校1年生

※奨学生やご家族の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。



気仙沼はかさ上げ工事が進み、あちこちに復興住宅が建ち始めている。
「先週、仮設から復興住宅に移って、私たちにも自分の部屋ができました」



「高校の野球部員は全部で90人くらい。7月から甲子園の予選が始まります」

中山美里さん・舞さん・翔くんは、気仙沼市に住む三つ子の姉弟。3人とも小学2年生のときに、学校の野球クラブで野球を始めました。しかし翌年、東日本大震災で学校が被災し、美里さんたちの家は津波で全壊、クラブの子どもたちも被災して、皆ちりぢりになってしまいました。

母の千恵子さんと父の健人さんは仕事が忙しく、生活のめどが立つまでと、市内のアパートで生活を始めます。一緒に住んでいた祖父母は仮設住宅へ。そして3人は、市街地から10kmほど離れた母方の祖母の家で暮らすことになり、学校も転校しました。両親に会えるのは、週末だけ。幼い3人にとって心細い日々が続きますが、そんなとき、方々の学校へ転校していった野球クラブの子どもたちが、また集まれるようにと「気仙沼ベースボールクラブ」が立ち上がったのです。震災2ヵ月後のことでした。

それ以来、週末は両親に会える日であり、友だちとも再び野球ができる、2倍に嬉しい日となったのです。

やっぱり家族で一緒に暮らそう

両親や祖父母と離れ離れの生活は、3人が中学2年生になるまで続きました。家族一緒に暮らしが再び始まったのは、実に5年ぶりのことです。これには、ある悲しいきっかけがありました。千恵子さんは振り返ります。

「津波で流された家は、新築してまだ4～5年目。ローンだけが残ってしまい、夫婦で一生懸命働きました。そんなとき、おじいちゃんが仮設住宅での慣れない暮らしの中、亡くなったんです。それで、もう家族ばらばらの生活は限界だ、このままだと皆だめになってしまうと、仕事を減らして仮設住宅で一緒に暮らすことにしました」

同じ頃、健人さんも無理がたたって体調を崩し、仕事を辞めることに。いまはだいぶ回復し無理のない仕事を始めています。千恵子さんも前より負担の少ない公民館の嘱託職員となりましたが、幸いローンは払い終えたそうです。「働くのも大事ですが、いまは子どもたちの成長を見守りながら、少しゆっくりしようと思っています」

甲子園に行きたい！

3人が通う高校は、宮城県内でも有数の野球の強豪校。ただ3人同時なので、就学支援奨学金がなければ、この高校への進学は無理だったと千恵子さんはいいます。

「すごく悩みましたが、奨学金のお話があったので、思い切って進学させることにしました。本当に感謝しています」

野球部は男子のみ。だから入部したのは翔くんですが、美里さんと舞さんも、子どものころからの成果が認められ、特別にマネージャーとして抜擢されました。

「練習はきつくて大変です。でも3年間続けるし、その後もやっていきたい」(翔くん)

「スコアをつけるのがちょっと難しいけど、部活はすごく楽しいです」(美里さん・舞さん)

野球に集中する3人ですが、将来の夢は三者三様です。「小さいころから子どもと遊ぶのが好きだったから、幼稚園の先生になりたい」(美里さん)

「警察官になって町の人を助ける仕事がしたい」(舞さん)

「いままでたくさんの人に助けられてきたから、今度は僕が人を助ける仕事に就きたい」(翔くん)

そして、いちばん近くて大きい3人の夢は……。

「甲子園に行きたいです!」

目を輝かせて宣言しました。



部活はバスケット部。「小柄だから試合中に何度も飛ばされますが(笑)、楽しいです」

留学を体験し 自分と向き合って 学んだこと

相良ひとみさん(仮名)

福島県会津若松市 高等専門学校2年生

東日本大震災が起こったとき、相良ひとみさんは双葉郡大熊町の小学4年生でした。直後の福島第一原子力発電所の事故により、町民全員が避難を余儀なくされ、以来ひとみさん一家も避難生活が続きました。そのストレスで、最初の1年は体調を崩してばかり。食事が喉を通らず、学校にも行けなくなったそうですが、7年が経ったいま、だいぶ心の整理がついてきたといいます。「大熊町は自然がいっぱいで、子どものころはいつも外で遊んでいました。それと、梨がおいしい(笑)。去年の春、震災後初めて自宅に戻ったのですが、庭は草ぼうぼうで変わり果てていて…。それを見ても落ち着いていた自分が不思議です。でも、ずっとここ(大熊)にいたいなあと思いました」

人のいなくなった大熊町は、いつか忘れられてしまうのではないかな。そう思うと悲しくなる、とひとみさんはいいます。

自分にできることを一生懸命

大熊町のこともあり、復興についてほかの国でも考えてみたい。そんな関心から、ひとみさんは昨年夏、2015年に大地震があった被災国ネパールに4週間留学しました。書類審査と面接に合格し、文部科学省が官民協働で取り組む留学支援プログラムに参加したのです。

「私は震災の被災者ですが、いまは住む家もあり学校にも通えています。でも、ネパールではいまだに学校に行けない子がいたり、崩れかけた家に住んでいたりと、復興が遅れている。その理由を知りたかったのと、少しでも子どもたちの心のケアができればいいと思って応募しました」

現地では、アンケートをとったり、首都カトマンズの学校を訪問したりと充実の日々。ところが、ひとみさんはここで大きな挫折を経験することになります。

「学校訪問では、外国のボランティアの人たちと行動していましたが、皆は英語がペラペラなのに、自分はうまく話せない。何か頼まれても理解できない。自分は全然ダメだと自己嫌悪に陥って、一度すごく泣いてしまったんです」

学校の勉強では、とくに英語に力を入れてきたひとみさん。昨年は英検2級を取り、今年は準1級を目指すなど、ずっと頑張っ

ています。それでも初めての海外で落ち込んでしまったとき、救いとなったのは、仲間と父の言葉でした。

「『あなたの英語はちゃんとできている。自信を持って大丈夫だよ』って仲間にいわれて。それを父にメールで伝えると、『カッコつけなくていいし、自分にできること、やりたいことをどんどん追求しなさい』と。それで、小さいことでも自分にできることがある。それを一生懸命やろうと思うようになったんです。この留学でいちばん大きな学びでした」

留学前は、些細なことでもよく落ち込んでいたそうですが、この経験を通じて精神的に強くなったといいます。

ひとみさんの趣味は絵を描くこと。ネパールでは、校舎に絵を描いて子どもたちの喝采を浴びました。また、お世話になったボランティア仲間にも、お別れに似顔絵を描いてあげたら、涙を流して喜んでくれたそうです。

「絵って、こんなに力があるんだなあ、とますます自分に自信が持てるようになりました」

留学体験で一回り大きく成長したひとみさん。大学では途上国への国際貢献について学び、将来はよりよい復興や開発について考える仕事に就きたい、と夢を話してくれました。

「私は精神的に弱いけれど、皆さんが応援してくださるおかげで、ひとつずつ、少しずつ、壁を乗り越えられています。いつか夢を達成して、恩返しができればいいなと思います」



ネパール留学では、学校の校舎に世界中の人たちが手をつないでいる絵を描いた。子どもたちに囲まれて



陸上も勉強も 精いっぱい 頑張っています

三浦隼人さん（仮名）
宮城県石巻市 高校1年生

走るのが大好き。「朝練には間に合わないので、ときどき自主的に走ってから学校へ行きます」

三浦隼人さんが通うのは、東北でも名高い陸上の強豪校。隼人さんはその陸上部に所属しています。陸上を始めたのは小学2年生のとき。兄の魁斗さんが短距離を走っていたので、同じスポーツ少年団に入ったのがきっかけです。そして、中学に入ると迷わず陸上部へ。

「中学では長距離と800mを走っていました。駅伝も走り、地区大会では5連覇を果たし、3年のときには大会新記録で優勝しました」

その実力を見込まれて、高校から声がかかったのです。全国といわず、海外からも優秀な人材が集まるだけに、入学したころは練習についていくだけで大変だったとか。中学に引き続き、高校でも長距離を走っていますが、少しずつタイムを上げており、次は800mも走りたいと意欲を見せます。

走ることが大好きで、ずっと走り続けたいという隼人さん。とはいえ、陸上一色にはしたくないといいます。

「勉強もちゃんとしたいと思っています。放課後、練習が終わって家に帰るのは8時とか9時ですが、それでも夕食の後、30分は必ず机に向かうようにしています。眠いときもありますが、楽しくなるともっと長く勉強します」

高校では進学コースを選んでいるため、陸上部との両立は大変です。また、陸上部の多くが寮生活で、6時からの朝練に参加できますが、電車通学の隼人さんは始発電車でなくても朝練には間に合いません。それでも、自分にできる限り、陸上と勉強を精いっぱい頑張っています。

いろいろな人と出会って話したい

母の琴美さんは美容師をしています。自宅兼美容室は地震と津波で被災し、しばらく再開できずにいましたが、昨年ようやく小さな店を借りることができました。シャンプー台から椅子まで、店の備品の多くは大阪の美容師グループから寄付されたものです。また、ハサミなどの道具は、津波に浸かったものを洗って使用しているそうです。

「冷蔵庫などの家電製品は仮設住宅で暮らしていたときに支給されたものですし、いまの暮らしも店も、いろいろな方からのご支援で成り立っています。震災から7年経ったいまでも、気持ちがふつ



「陸上部にも海外の生徒がいます。英語を勉強して、いろんな国の人と話してみたい」

と引き戻されることがあります。そんなとき救いとなるのは、いろいろな形で支援してくださる皆さまの想いです。就学支援奨学金も息子の教育資金に充てさせていただいており、感謝してもらえませんか」

生活再建にはまだまだ道半ばですが、隼人さんには「安心して、好きなことを自由にやってほしい」と願っています。

そんな母を気遣いながらも、のびのびと育っている隼人さん。学校でいちばん楽しいのは、いろいろな友だちと話をするときだそうです。

「人とコミュニケーションをとるのが好きなんです。だから、英語も話せるようになりたい。そうすれば、違う文化の人たちと出会って話ができるから。海外にも行ってみたいです」

高校卒業後は、進学も考えていますが、いまは消防士を目指そうと思っているとか。

「人を助ける仕事がしたいです。震災のことはもうあまり思い出ませんが、当時は大変な状況のなか、消防の方や自衛隊の方が一生懸命、活動していました。そういうことで人の役に立てるのは素晴らしいと思います」

人が好きで、好奇心旺盛な隼人さん。これからどんな人と出会い、どんな人生を切り拓いていくのか。まっさらな未来が広がっています。



病気が再発しないように、あまり無理をしないよう気をつけながら勉強を頑張っている

大好きな英語を もっと学んで 仕事にも生かしたい

山本美鈴さん（仮名）
福島県福島市 高校2年生

「いまはもう、すっかり元気になりました」と笑顔で語る山本美鈴さんは、市内の高校に通う2年生。1年前、インフルエンザがきっかけで高熱が続いたため、いろいろな検査を重ねた結果、免疫系の難病ではないかと診断されました。入院をし、学校も2ヵ月ほど休みましたが、その後、自然に回復してきたそうです。

震災のときは小学4年生。双葉郡浪江町で被災した後、原発の事故により、二本松市の体育館から岳温泉、仮設住宅、福島市の借り上げ住宅と、一家は各地を転々としてきました。復興住宅に移ったいま、ようやく落ち着いた暮らしができるようになったといえます。病気になった原因は、これら震災によるストレスとも考えられるとか。

「辛くても、あまり外に吐き出さないタイプだとよくいわれます。いつも我慢していたからかもしれません」と美鈴さん。

女手ひとつで働きながら子育てをしてきた母の芙美子さんにとって、この7年はあつという間だったといえます。

「私も無我夢中でしたが、子どもたちも一生懸命、頑張ってくれました。ただ、美鈴が病気になったときは、生きた心地もしませんでした。幸い自然に回復しましたが、少しでも元気がないと心配になってしまいます」

美鈴さんの姉、美佳子さんも、避難生活の中で不登校になったことがあります。震災以来、親子3人は、目に見えない苦労をひとつひとつ乗り越えてきました。そしていま、美佳子さんは希望する大学で学び、美鈴さんも希望校に入学し、新たな友だちもたくさんできて、充実した学校生活をおくっています。

夢はどんどん膨らんで

美鈴さんがいまの高校を選んだ理由は、とくに英語教育に力を入れているから。英語のほかに好きな科目は？と尋ねても、「英語がいちばん好き」と答えるくらい、英語を熱心に学んでいます。

「中学のときの英語の先生がユニークで、授業がとても楽しかったんです。それで、英語が好きになりました」

中学時代に住んでいた二本松市では、英語のスキット（寸劇）大会で見事、優勝。高校1年のときも、スキットの全校大会で優勝



「浪江の友だちとも二本松の友だちともバラバラになったけど、いまは、ここ福島市で友だちがたくさんできました」

したほどの実力です。大学進学を希望しているので、高校では特別進学コースを選び、英語だけでなく毎日、勉強に励んでいます。「大学では英文科に進んで、できれば英語以外の言語も学んで、留学もしてみたい。そして、ファッションに興味があるので、英語を生かして、日本と海外をつなぐバイヤーなどの仕事をしてみたいです」

美鈴さんの思いはどんどん膨らみます。

「娘たちが巣立っていくのは寂しいし、経済的にも厳しいですが、震災でいろいろな苦労をさせてしまったので、それをバネに自分のやりたい方向へ進んでほしいです」と芙美子さん。その一方で、支援への感謝の思いは常にあるといいます。

「避難生活を続けていると、どうしても孤独な気持ちになってしまいます。でも、さまざまなご支援を通して、気にかけてくださる方がいると思うだけで、すごく心強いです」

美鈴さんは、浪江の自宅へはまだ一度も帰っていません。

「こちらの暮らしが落ち着いてしまって、帰りたい気持ちは薄れてきたかな。でも、浪江は私にとって大事な場所です」

ふるさとの思い出を胸に、のびのびと学び、大きく夢を描く美鈴さんです。



部活は軽音楽愛好会。「ボーカルを担当していて、文化祭や松島のイベントで演奏しました」

観光で地域を 元気に。そして いろいろな人と 関わりたい

桂川映美さん（仮名）

宮城県多賀城市 高校2年生

映美さんは高校の観光科で学ぶ2年生。観光科を選んだわけは、住み込みで仕事を学ぶホテル実習がおもしろそうだったからです。

「表から見えないところが気になる性格で、ホテルの裏側でどんな仕事をしているのか体験してみたかったです」

住み込みでほぼ1ヵ月。実際はとても忙しく、わからないことを「わからない」といえず、失敗して怒られたことも数知れず。ただ、仕事は大変でしたが、客室の整備や片付けなど、宿泊客一人ひとりのことを考えて細やかに作業をすることで、身についたことはたくさんあるといいます。

行動的な映美さん、観光科ではガイド実習にも力を入れています。松島の牡蠣祭りで司会運営を手伝ったのが好評で、それからいろいろなガイドを経験するようになりました。

「松島をはじめとした地元の観光地を、県外の修学旅行生などにガイドします。観光地について調べると、自分の知らないことが学べるし、それを人に伝えていけるのが楽しいです」

母への思いを胸に

映美さんの家族は、以前は宮城県女川町に住んでいました。でも、震災で母が営む店と自宅が全壊し、町はほぼ壊滅状態に。だから、観光によって宮城県と地域を元気にしたいという思いが、映美さんの気持ちにはあるといいます。

母の史織さんは、末っ子の映美さんが2歳のときから、女手ひとつで5人の子供を育ててきました。毎日寝る間も惜しんで働きっぱなしだったところへ、震災が起こります。すべてを失いましたが、いまは多賀城市に移り住んで、トレーラーハウスで飲食店を始めました。

「震災のときに義援金をいただき、たくさんの方に支えられていると知りました。そのお礼をしたくて、自分に何ができるか考えてみました。それで、皆さんに喜んでもらえるように、心を込めて料理をつくろうと思ったんです」

避難所で子どもたちに何が食べたいか尋ねたとき、「お母さんの料理が食べたい」といわれ、その言葉も、お店を始める原動力になったといいます。

上の兄弟は次々と巣立ち、いまは映美さんと史織さんの二人暮らし。母を思う映美さんの気持ちは人一倍です。

「ある日、電車に乗っていたとき、母が手すりにつかまっていたんです。その手がすごくひび割れていて…。苦勞をかけているなと思ったら、涙が出てきました」

一方、史織さんは映美さんに大きなエールを送ります。

「こうやって二人になると、映美はなおのこと私を守ってくれようとしています。でも、このまま天真爛漫に自分の道を切り開いて、好きな道を歩んでほしい。願うことはそれだけです」

そんな思いを胸に、映美さんの好奇心は広がります。授業やガイド実習などの空いた時間にはアルバイトをし、お金を得る大変さも知りました。実習もバイトも、嬉しいことも辛かったことも、やってよかったと思えるものばかりです。

「いろいろな人と関わって、私の知らない人生について聞いてみたい。そして、ひとつの考えに囚われない、幅広い考え方のできる人になりたいです」

将来は、身のまわりの電気機器などがどうやってできているのか、どういう人たちがつくっているのか、製造業の人たちと関わり合いながら、それを人に伝えるような仕事に興味があると。

「いつか私も、自分たちの日常の生活をかたちづくる一人になりたいです」



松島と同じ日本三景のひとつ、京都府の天橋立で出張ガイドをする映美さん。
「松島の素晴らしさを皆さんに紹介しました」



「もうすぐ仮設から新しい校舎に移るのが楽しみです」

気仙沼の おいしい海産物で 地元の役に立ちたい

松野ルミさん（仮名）
宮城県気仙沼市 高校1年生

「海に関する基礎知識を幅広く学ぶ水産海洋基礎の授業が、いま一番面白い」という松野ルミさんは、高校の産業経済科で食品の加工や宣伝などについて学んでいます。

「地元で獲れる食材のことや、その加工と販売など、水産について学んだら将来に活かせると思って…」

被災地の例に漏れず、気仙沼も人口が減り、震災前に比べると活気がなくなっています。そこで、海産物加工の仕事に就いて地元の役に立ちたい、という思いがあるといいます。もちろん気仙沼の海産物はルミさんの大好物。

「中でもサンマはトップです（笑）。獲れたての刺身と塩焼きは、本当においしいですよ」

父の忠洋さんは食品梱包材を扱う会社で働いており、納品先から鮮魚や加工品をよくいただいて帰ります。そんなことも、食品加工業が身近になった所以でしょう。

「2年や3年生になると、缶詰をつくったり、自分たちでレシピを考えて加工したりといった実習があるので、いまから楽しみです。学校の文化祭でも販売するようです」

水産海洋基礎のほかに、好きな学科は数学。もともと苦手でしたが、中学のときに尊敬できる先生と出会い、数学が好きになったそうです。そのせいもあって、将来は学校の先生にもなりたいとか。いろいろなことに興味のあるルミさん、部活は写真部に入りました。小さいカメラを買ってもらい、出かけるときにはいつも持ち歩いています。

「昨日は、卒業した中学の部活（吹奏楽部）を応援に行って撮影したし、先日はテニス部の大会のようすを撮影しました。カメラを向けると、みんないい表情になるんです」

1年前、家にやってきた“わさび”という名の猫も、よく撮影するそうです。

震災を未来へつなげていく

震災後の6年間、ルミさんの家族は仮設住宅で暮らしてきました。中古の住宅に移り住んだのは、つい去年のことです。

「いまの家に引越してみると、仮設は狭かったなあと思います。やっと自分の部屋が持てました」

ルミさんの通う高校も、震災以来ずっと仮設校舎でしたが、この夏、ようやく新校舎での授業が始まります。震災のとき小学2年生だったルミさんにとって、瓦礫からの復興はずっと当たり前の風景でした。

「小さいころから工事をやっている中で育ったので、それが普通だと思っていました。ほかの町を見て初めて、工事をしていないのが普通なんだと気づきました。でも、どんどん建物や町ができていくので、復興している実感はあります」

昨年、地元新聞に掲載された作文には、震災を体験した自分を受け入れ、未来へつなげようとする思いがにじんでいます。「命さえあれば何でも何度でもやり直せる」。その教訓を「後の世代へ語り継ぐ使命」ととらえ、震災があったからこそ大切な出会いがあったと綴ります。

リボンが可愛い高校の制服は、今年度からデザインが新しくなったものです。

「この制服も、皆さまに支援していただいた奨学金で買ってもらいました。とても気に入っています。3年間大切に着よう、と入学したときに決めました」

地元への思い、さまざまな人との出会いが、ルミさんの足もとをしっかりと照らしています。



「子どものころから気仙沼のおいしいお魚を食べて育ちました」



「小さいころから絵を描くのが好きで、船の絵もよく描きます」

船が好きだから、 生まれ変わった町で 海洋について学ぶ

菅野慶次郎さん

岩手県陸前高田市 高校1年生

「子どものころは鉄道が好きだったけど、いまは船が好き」という菅野慶次郎さんは、陸前高田市の高校1年生。船に乗ってみたいから、将来は漁業の仕事を目指そうと、高校の海洋システム科で学んでいます。

「海洋基礎という授業は先生が面白くて、海洋生物や船のこと、漁業で使う道具、気候についてなど、基礎的な勉強をしています。そういうこと全部が楽しいです」

いまは普通科と同じ授業も多いのですが、2年生になると海洋関係の授業が増えるとか。船に乗って作業をするような実習も始まるので、慶次郎さんはいまから胸を躍らせています。海洋システム科は定員が少なく、1年生はわずか9人。

「ちょっと寂しいんですけど、9人で力を合わせて頑張ろうと思っています。チームワークはいいですよ」

高校在学中に、小型船舶の免許のほか、ダイビングの資格などもとりたいと意気込む慶次郎さん。ただ、泳ぎが得意ではないため、水泳部に入部しました。水泳部でもクラスでも、一番楽しいのは友だちといるとき。休み時間には普通科にまで行って、いろいろな友だちとおしゃべりするそうです。

そんな慶次郎さんが、友だちと離れ離れで「とにかく悔しかった」という出来事がありました。

ゼロから頑張る父を見て

7年前、東日本大震災で陸前高田が津波にのまれたとき、慶次郎さんは仙台市内に住んでいました。当時は小学2年生。

「陸前高田から引越して間もないころだったので、学校には慣れないし、高田の親類や友だちは心配だし、地震は怖いしで、すごく不安になりました」

幸い友だちは皆無事でしたが、慶次郎さんには、何もできず悔しかった思いだけが胸に残っています。それだけに、数年後、陸前高田に戻ったとき、一番嬉しかったのは友だちとの再会だったといいます。

父の秀一郎さんは、陸前高田で100年続くお菓子屋の5代目。しかし、事情があって店を閉めていた間に震災が起こります。そして震災後は一転、やめようと考えていた店を、まずは仮設



父の秀一郎さんと、再建した新店舗の前で

店舗で始め、今年（2018年）4月には津波対策でかさ上げした新市街地にオープンしたのです。

「私も震災で弟を亡くしましたし、家も店も流されましたけど、弟の姿や以前の町は覚えています。そういう記憶を次の世代に伝えていかないと、新しいものは生まれてこない。次につなげるパイプ役でありたいと思って仕事をしています」

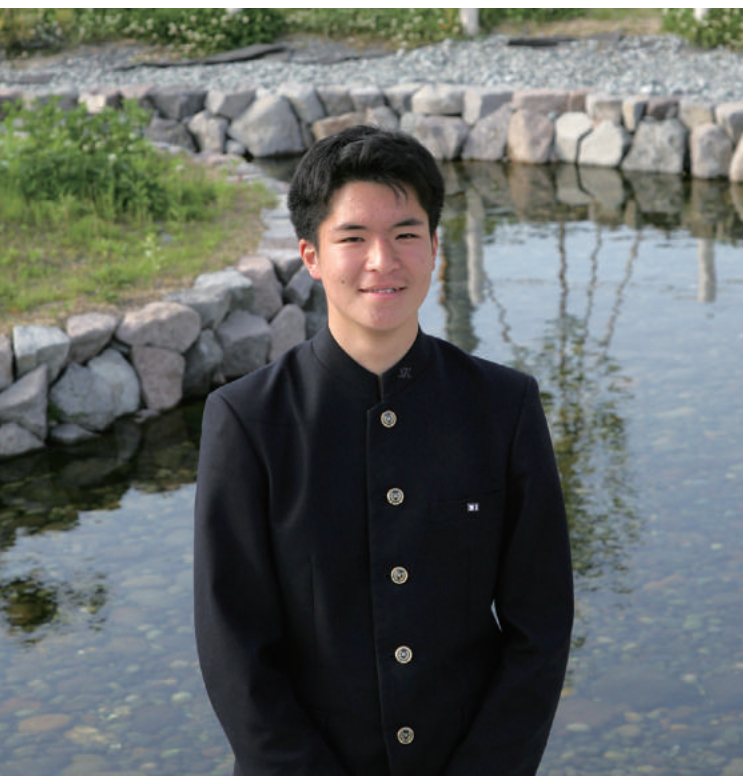
そんな父のことを、慶次郎さんは心から応援しています。「父は仮設店舗でも頑張っていたし、何もなくなった町で、もう一回店を始めるのはすごいなと思った。開店して数日で1000人以上のお客さまが来てくださいました。毎日、夜遅くまで働いているから、ただ頑張ってるのひと言です」

陸前高田ではいま、10mほどかさ上げした上に、新しい町が生まれようとしています。秀一郎さんのお菓子屋を含めて、まだ数軒の店しかありませんが、それぞれが表に創業年を掲げました。「この下に本当の町があった。その当時、来てくれていたお客さんがいて、これまでの何代かがいて、いまがある。創業年は、突然始まった町じゃないんだよ、という皆の自負ですよ」と秀一郎さん。その店を継ぐため、慶次郎さんの兄が修行中です。次男の慶次郎さんは、「父は、自分には好きなことをやれといってくれます。だからこそ、責任を持って将来のことを考え、頑張らないといけないと思っています」

勉強とサッカーを 両立しながら 整備士を目指したい

安田哲也さん(仮名)

岩手県上閉伊郡大槌町 高校1年生



いちばん楽しいのは友達と一緒にいるとき。「仲よしはいっぱいいます」

2019年3月、震災以来、復旧が望まれていたJR山田線の宮古～釜石間が開通し、三陸鉄道に運営移管されました。これによって、北は久慈(くじ)駅から南は大船渡の盛(さかり)駅まで、第三セクターとしては日本最長の163kmが三陸鉄道リアス線としてつながりました。再建された大槌駅から隣の釜石駅まで、「三鉄(さんてつ)」として愛されるこの鉄道で通学しているのが安田哲也さんです。

大槌湾に浮かぶ蓬莱(ほうらい)島は、NHKの人形劇「ひょっこりひょうたん島」(1964年放送開始)のモデルになったとされます。そのひょうたん形を模した真新しい大槌駅から、毎朝7時過ぎの列車に乗車。わずか1車両なのですがぐにいっぱいになってしまう、のどかな満員列車での通学です。

高校では機械科を選んだという哲也さん。理由は、自分の夢に近づける資格が取れるからだといいます。

「僕の夢は、電車や飛行機の整備士になること。小さいころから車などの乗りものが好きで、とくにその構造に興味があります。それで、整備士に必要な機械加工技能士の資格が取れると知って機械科に入りました」

整備士を目指すだけあって、好きな授業は数学。計算のほか、とくに図形の角度を求めたりするのが得意だといいます。

「数学のほかには、鉄を溶かしたり、ガスバーナーで金属を切断したりする溶接実習が1年から始まっていて、それも楽しいです」

すでに新しい友だちができ、先生方も「面白い先生しかない」という学校で、自分のなりたい職業に向かって学んでいます。

ずっとサッカーを続けてきた

小学生のころ始めたサッカーは、哲也さんが大好きなスポーツです。中学でもサッカー部に入り、2年生からは大人に混じって地元のフットサルチームでもプレーしました。もちろん高校でもサッカー部。以前はフォワードでしたが、いまはキーパーの練習もしているそうです。

「キーパーはまだ慣れないので、滑ったりして痛いときもあるけど頑張っています。高校のサッカー部はちょっと厳しいですが、先輩たちと一緒にやるのは楽しい。個人個人のテクニックがすごいなあと思います」

放課後と土曜日は練習、日曜も練習試合などがあるため、勉強しているとき以外はサッカー一色の日々。友だちと遊ぶときも、サッカーをすることがよくあるとか。海外チームの試合もよく見ます。「好きなサッカー選手はアントワーヌ・グリーズマン。フランス代表なので、もし海外旅行に行くとしたら、いつかお金を貯めて彼の出身地フランスに行ってみたいです」

学校の皆で山に登って避難

8年前の震災で、大槌町は地震と津波、さらに一帯の火災によって甚大な被害を受けました。震災のとき、哲也さんは小学1年生。その日は日直でした。

「さよならをいった瞬間にゴーッとになって、全校生徒で校庭の真ん中に集合して、地面が割れたりして怖かったのを覚えています。でも先生が落ち着かせてくれて、裏の城山に皆で急いで登って、上から町を見ていました。泣いている人もいました」

それから山の上にある城山公園の体育館に避難。一方、父の友則さんは、職場のある釜石で被災してその日は帰れず、携帯も通じません。子どもたちが心配で翌朝4時間歩いて帰りましたが、哲也さんと会えたのはさらにその翌日だったそうです。家族は無事だったものの、その後の生活再建に無我夢中だった友則さん。

「震災のとき哲也は小学1年生。双子の娘たちは3、4歳。幼い子ども3人を抱えて全壊した家をローンで再建。生活は大変でした。そんな中、哲也は友だちも多く、妹たちの面倒をよくみるいいお兄ちゃんでした。哲也には、目標に向かって元気に育ってほしいです」

支援者の方々に対して、哲也さん自らがこう語ってくれました。

「奨学金をいただいて、三鉄リアス線の定期とか、いろいろなことに使わせてもらって、とても助かっています。部活でもユニフォームやスパイク代のほか、遠征などもあるので役立てていきたいです」



子どものころから続けてきたサッカーで真剣な表情

希望校に入学し 部活では部長として がんばっています

山口美佳さん(仮名)

岩手県陸前高田市 高校2年生

いろいろな人に支えられた高校進学

山口美佳さんは子どものころ、授業についていくのが少しゆっくりだったため、小学2年生から中学まで特別支援学級で学びました。先生の提案だったそうですが、父、靖友さんも、急かさず、本人のペースでやれば良いと思ったそうです。しかし、そのまま支援学級の高等科へ進むつもりが、中学2年のとき、担任の先生に「普通高校を受験してみないか」と勧められたのです。先生たちも皆でサポートするからと。静かに見守ってきた靖友さんは、こう振り返ります。「本人がやる気になったので、背中を押してやろうと思いました。高校に合格したら、その後の選択肢も広がりますので。ただ、こちらから『勉強しろ』とはいいいませんでした」

中学3年から普通学級に編入した美佳さん。それまでのゆっくりとしたペースとは違い、授業についていくのがやっと。そして、厳しい受験勉強が始まりました。

「授業が終わると皆はずぐ帰るのだけど、私は学校に残って先生と一緒に勉強。必死だったので、ほとんど毎日残って頑張りました。授業がわからないときは、友だちにも教えてもらいました」

1年間の努力の甲斐あって、第一志望の県立高校に見事、合格。先生や仲間たち、そして温かい家族に支えられた結果です。

人との触れ合いで 苦手なコミュニケーションを克服

高校は少人数制で、地域の人たちとの交流も多いといいます。この学校で、美佳さんは次々と新しいことに挑戦してきました。

そのひとつがボランティア活動です。学校では毎年いろいろなボランティアを募り、生徒は自由に選べるのだとか。美佳さんは、町の森林公園で保育園の子どもたちと過ごすボランティアのほか、お年寄りの家で掃除などの手伝いも経験しました。

「子どもたちは自由に動き回るので、ちゃんと見ているのが大変だったけど、とても楽しかったです。お年寄りのお手伝いをしたときは、『ありがとう』といってもらえたのがすごく嬉しかった」

美佳さんが住むのは、被災者のために建てられた復興公営住宅。ここにも震災後に一人暮らしとなったお年寄りが多く、その方々に目がいくようになりました。

「役に立つかはわからないけど、近所に住むお年寄りに声をかけるとか、小さいことでもいいのでやってみたいと思います」

もうひとつ、美佳さんにとって初めての体験は、部活でソフトテニス部を選んだこと。1年の途中からは部長を務めています。

「テニスは初めてなのに、同級生からも先輩からも『部長をやってみたら?』と勧められて、頑張らなくちゃと思いました。皆が支えてくれるので、部を引っ張っていきながら、いいにくいことも指示できる



「奨学金は部活のラケット代や遠征費などにも使わせていただいています」

ようになりました。私は人と接するのが苦手だったのですが、ボランティアや部活などで人と触れ合うことで、コミュニケーションがうまくできるようになりました」

そんな美佳さんは、将来、人とのコミュニケーションが欠かせない販売の仕事に就きたいと考えています。両親は二人とも販売の仕事をしており、中学のときは母の職場に体験学習に行ったとか。「母が働く姿を初めて見て、カッコいいなあと思いました。それが、販売の仕事をやりたいと思ったきっかけです」

できれば地元で働きたいという美佳さん。ふるさと陸前高田は、皆が優しく接してくれるところが好きだといいます。「少しずつ町ができていますが、まだまだ足りない部分はいっぱいあります。だから、応援していきたい」

震災のとき、父の靖友さんはチリ地震津波を経験した祖母の教えでなんとか山に逃げきり、小学2年生だった美佳さんも周りの人たちの助けで祖父母と高台に逃げ、命が助かりました。あれから8年、いろいろな人に支えられ成長してきた美佳さんですが、これからは人に目を配り、ときには支えてあげられるような社会人になってほしい。それが靖友さんの願いです。



好きな授業は数学。「難しいけど、計算するのが楽しい」

いちばんの憧れは イラストや デザインの仕事

川本夏実さん(仮名)

宮城県気仙沼市 高校1年生



「航海実習もあります。
小さいころおじいちゃんの船に乗せてもらっていたので、船に乗るのが好きです」

自分の特技をいかして

川本夏実さんが中学生のころから憧れているのは、イラストを描いたりデザインしたりする仕事。将来はいったん都会へ出て、専門学校で勉強したいと考えています。

そんな夏実さんが進学したのは、地元の高校の産業経済科。この科を選んだのには、理由がありました。2年生になると、生徒自身がサンマの缶詰をつくる実習があり、そのパッケージデザインをしてみたいと思ったのです。地域の産業に役立てようと、道の駅や文化祭などで販売するサンマ缶は人気商品で、パッケージも生徒が手がけています。夏実さんは小さいころから絵を描くのが好きなので、海や船のイラストを入れてデザインしてみたいのだとか。「震災の後、気仙沼の町はいろいろ新しくなって、前の面影がなくなったのが寂しい。高校生になったので、これからは町の復興にも関わっていきたいと思います」

学校の活動を通して気仙沼の復興に関われるのを、いまから楽しみにしています。

部活は、美術部がないという理由から写真部に。まだ活動は始まったばかりですが、秋の文化祭に向けて地元のいろいろな風景を撮りたいといいます。

「気仙沼は海がきれいなので、海の写真を撮りたいです。私が育った家の近くは海に向かって開けていて、そこがいちばんのお気に入りの場所です」

学校では「水産海洋基礎」の授業が一番面白いそう。

「海の中のことや自分の知らないことを、いろいろ教えてもらえるから」

将来のために、簿記や電卓実務などビジネスに必要ないろいろな資格も取りたいそうです。

友だちのいる地元が好き

夏実さんが生まれ育ったのは、太平洋に突き出た半島の地区。家から50m先に海がある、豊かな自然の中でのびのび育ちました。けれども、小学1年生の終わりに震災が発生。自宅は23年分のローンを残して流されてしまいます。その後、一家は避難所から曾祖母の家へ。そして5年間の仮設住宅での暮らしを経て、家を再建したの

は3年前。夏実さんが中学1年生のときです。母の雅子さんはこう振り返ります。

「ダブルローンしてでも家を建てざるを得なかったんです。共働きでは復興公営住宅の家賃が高くなり、家のローンと比べたら家賃のほうが高かったんで、家を建てることに決めました。そのローンは25年。そんな事情があるので家計は苦しく、夏実の高校進学の際には、制服代や通学の定期代など、奨学金が本当にありがたかったです」



「韓国とアメリカに行ってみたい。
韓国ではおいしいものを食べて、アメリカでは最先端のデザインや美術を見てみたいです」

新しい家は、前の家と同じ地区の高台に建てられました。

「前の家は交通の便が悪かったので、私は家を建てるなら便利な市街地の方がいいと思っていました。でも、夏実がどうしても地元がいいと…。津波のために家の基礎部分しか残らず、子どもたちの小さいときの写真まで全部流されてしまいました。それ以来、子どもたちにはいっぱい不自由をさせました。でも、狭い仮設住宅でも夏実は何ひとつ文句をいわず、すごく我慢してきたと思うんです。だから、転校したくない、友だちと離れたくないという思いに押されて、同じ地区に建てることにしました」

友だちに好かれ、頼りにされる夏実さん。高校で新しい友だちもできましたが、地元の友だちもいるのが心強いとか。小さいころからの友だちとは、いまでもずっと仲よしだそうです。

「この前は、地元の友だちと一緒に海に遊びに行きました。まだ肌寒いけど、足まで海に浸かったりして楽しかったです」

毎朝、友だちと一緒にバスで元気に通学。働く母を気遣い、家では掃除や茶碗洗い、夕飯の準備など、家事のお手伝いもしっかりしているそうです。

新しい環境で いろいろ挑戦して 世界を広げたい

松本綺羅さん(仮名)

宮城県東松島市 高校1年生

松本綺羅さんが通っているのは、地元から少し離れた学校。部活と勉強を両立できる進学コースがあるという理由から、この学校を選びました。まだ漠然とですが、大学に進学したいという希望を持っているそうです。苦手な科目は数学と英語。

「とくに英語は、いまはまだ基礎なのでわかりやすいけれど、3年になったら難しくなりそう。世界を広げるためにも、しっかり復習して克服したいです」

学校までは、電車やバスで1時間くらい。地元の友だちとは違う高校になったけれど、寂しくはなかったといいます。

「知り合いはあまりいませんが、新しい環境で高校生活を歩みたいと思いました」

学校は、綺羅さんのように市外から通う生徒はもちろん、県外や外国からの生徒もいます。そんな学校で自分の殻を破って視野を広げてほしいという母、佐和子さんの後押しもありました。高校ですでに何人か友だちができ、休み時間におしゃべりしたり、一緒にお弁当を食べたりするのが楽しいとか。

そして、綺羅さんが部活として選んだのは、これまで経験のなかった軽音楽部です。

「ギターとかドラムに憧れがあって、自分も演奏できるようになりたいと思いました。そのうち、バンドをつくって練習するようになるのかな。私はヨルシカというバンドが好きで、いつかその曲をギターで弾けるようになりたいです」

授業でも音楽が楽しいといいます。中学の授業と違うのは、実際にいろいろな楽器に触れられるところ。ギターもクラス全員分の数があるそうです。

奨学金に助けられて

震災が起きたのは綺羅さんが小学1年のときです。東松島市は南側が太平洋に面し、全世帯の約97%にあたる1万4000棟以上の家屋が地震と津波による被害を受けました。築2年ほどの綺羅さんの自宅は大規模半壊し、床上浸水の被害にも遭いました。津波による倒壊は免れたものの、水が引いたのは2日後のこと。建物のダメージはひどかったと母の佐和子さんはいます。

「誰にも文句はいえませんが、毎年毎年どこかしら修理しています。壁に隙間が空いて、それがまた余震で縮まったことも(笑)。」

それでも、綺羅さんにはできる限り経済的な理由で我慢させたくないと考えている佐和子さん。

「入学前に支給された奨学金は、制服や教科書、入学一時金などに使わせていただきました。その後は修学旅行などにあてようと考えています。お金のことで『無理だ』といわずにすんでいるのは、奨学金に助けられているからです」



「東松島は、自然が豊かで住みやすいところが好きです」

いつか制服をデザインしてみたい

将来について、綺羅さんには憧れている仕事のひとつあります。「私は制服が好きなので、いろいろな制服をデザインしてみたい。自分の高校のも好きですが、他校の制服を見たり、調べたり、自分でもデザインを考えたりしています。制服ってさまざまですが、もし私がつくるなら、その学校の校風にあった制服にしたいです」

夢を語る綺羅さんに、佐和子さんはいます。「自分の人生は自分のもの。綺羅には家のこととか気にせず、自由に、強く優しく生きてほしいなと思います」

そんな家族の応援もあって、綺羅さんはいま、自分のやりたいことを見つけて、ひとつずつ挑戦しています。



「休日には新しい学校の友だちと仙台まで遊びに行くこともあります」

子どもたちに 夢を与えたいから ゲームクリエイターに

高山秀行さん(仮名)

岩手県上閉伊郡大槌町 高校1年生



大好きな大槌町。震災前の町並みを再現した模型を背に

大槌が大好きだから

大槌生まれの大槌育ち。中学卒業後も、大槌の高校に進学した高山秀行さん。地元の高校を選んだ理由は、大槌が復興する姿を近くで見たいから。

「昔の大槌は、お店がいっぱいあって活気にあふれていました。それが震災でなくなったので、元気な大槌をまた見たいなあ、と思います。僕の高校には復興研究会というのがあって、2年になったらぜひ入りたいです」

復興研究会は、神戸大学と共同で町内180地点の定点観測をするなど、町の復興につながる活動を続けています。秀行さんは来年この研究会に参加して、自らも復興に携わりたいと考えています。

町はまだまだ復興途上ですが、秀行さんは大槌の豊かな自然も大好き。子どものころから、友だちと海や川で釣りをしたり、山に登って遊んだりしてきました。



お昼の弁当は母の手づくり。「おかずはちょくちょく変わるけど、基本全部好きです」

「海釣りではいちばんの好物は、40cmちょっとのアイナメ。渓流ではヤマメなどを釣ります。魚をさばいたりもします」

魚の釣れるシーズンで部活のない日には、いまでも友だちと誘い合って釣りに行くそうです。

震災を経て得た夢

秀行さんは、将来ゲームクリエイターになりたいと考えています。学校から帰ったら、ゲームクリエイターの仕事について、いろいろと調べたり学んだりしているそうです。

「僕は、子どものころからゲームが好きです。とくに好きなのはロールプレイングゲームで、楽しいものや、感動できるストーリーもいっぱいあるんです」

秀行さんがゲームに親しんだのは、震災がきっかけとっていいかもしれません。震災が起きたのは、小学1年生のとき。築後わずか1年の家が流されたため、一家は避難所を経て母の実家へ。その後アパートに移り、しばらくして再び母の実家へ戻ります。気持ちも住まいも落ち着かないまま、小学生の秀行さんと2つ下の弟は、母の美津子さんとゆっくり話をする時間も取れない生活が続きました。美津子さんは、大きな被害を受けた職場で震災対応があり、当時は寝る暇もないほどの忙しさだったのです。

「家に帰るのは毎晩12時過ぎで、朝7時には出勤。子どもたちが寝た後に帰って、まだ寝ているうちに出て行くような生活です。震災後、子育ては実家のおばあちゃんに任せっきり。子どもたちには、さびしい思いをさせたと思います」

いまは美津子さんが子どもたちと向き合う時間をつくれるようになりましたが、気持ちの揺れた少年時代、秀行さんの毎日を明るく弾ませてくれたのが、ゲームであり、海や山と一緒に遊ぶ友だちだったのです。そんなこともあって、秀行さんは、将来ゲームの仕事に携わり、今度は自分が子どもたちに夢を与えるストーリーをつくってみたい、と考えるようになりました。

体を動かすことが好きだという秀行さん。小学校ではサッカー、中学では新しいことに挑戦しようと卓球部に。そして高校には卓球部がなかったため、バドミントン部に入りました。

中学とは違う部活に入ったので、道具一式を揃えるのにも奨学金が役立ったと美津子さんはいいいます。

「買うからにはちゃんと続けるんだよ、と確認した上で、奨学金を使わせていただきました。ほかにも制服をはじめ、入学の準備ってこんなにお金がかかるのかと思いました。でも、入学前に1年目の奨学金をいただけたので、それがすごく心強かったです」

始まったばかりの高校生活。新しい友だちもでき、秀行さんは、大切な夢に向かって歩み始めました。

社会とつながって 地域や人のために 行動したい

杉山さやかさん(仮名)

宮城県気仙沼市 高校2年生

「好きな授業は数学。物理もおもしろいです」という杉山さやかさんは、地元の高校に通う理系女子。「数学は、公式を覚えてそれを当てはめていけば答えが出る。そんな感じが好き」といいます。理系に強いということもあり、進路は医療系を目指しています。「看護学校とか大学の看護学科に進んで、地元で看護師になりたい。いちばん行きたいのは石巻の看護学校です」

調理部で忙しい毎日

さやかさんが震災にあったのは小学2年生のとき。当時暮らしていたのは、津波とその後の火災で大きく被災した地区で、さやかさんの自宅も全壊の被害を受けました。震災後に住んだ仮設住宅や復興公営住宅は、通っていた学校から遠かったのですが、友だちと離れたくなくて、小・中ともにスクールバスで学区外通学しました。でも、高校はいま暮らしている復興公営住宅に近く、ようやく帰りのバスの時間を気にせず通学できるように。そんなこともあって、さやかさんは部活にも忙しい日々をおくっています。

「部活は調理部です。ハロウィンでカボチャのプリンをつくるなど季節のイベントで料理をつくったり、食物調理検定の勉強をしたり、コンテストに応募するレシピを考えたり、ほぼ毎日活動しています」

先日、調理器具メーカー主催のスイーツコンテストに応募。チームで考えてつくったケーキの写真を送りました。

「『お母さんや地域の人に感謝を伝えたい』というコンセプトで、ヨーグルトムースやフランボワーズジャムを使ったレシピを考えました。飾りつけは、風船に垂らしてつくった飴細工とマジパンです」

華やかで可愛いケーキの写真(下)を見せてくれました。夏休み前に予選の結果が出て、本戦は夏休みにあるそうです。



「家でもクッキーを焼いたりします」

チームでコンテストに応募したケーキ



「文化祭のコンテストでは、クラスの皆と協力して動画をつくって楽しかった」

保護動物についての活動が自信に

もうひとつ、さやかさんがいま、やりがいを感じているのはNPOが主催する高校生向けプロジェクトへの参加です。自分たちで身の回りの課題についてテーマを決め、計画を立てて実行し、それを発表するというプロジェクトです。1年のときに学校でポスターを見かけ、地域のために何かできないかと、友だち3人でチームをつくりました。そうして決めたテーマは、「保護動物について皆に知ってもらって殺処分を減らそう!」というもの。

「保健所に行って話を聞き、一方の視点だけではダメだからと、ペットショップの方にも話を聞きました。また、海外の取り組みについて調べたりもしました」

その結果をまとめて、公民館や学校などで発表したそうです。「3人で取材をし、調べた結果、それぞれが全然違う考えを持っていました。ひとつにまとめることはできなかったけれど、それはそれでいいんじゃないかと思います。私自身は、野良猫ではなく、地域猫という捉え方をすれば、地域全体の猫として考えてもらえ、殺処分も減らせるのではないかという考えに至りました」

人前で話すのが苦手だというさやかさん。プレゼンテーションでは緊張したといいますが、動物保護活動をしている人に「高校生が考えてくれて嬉しい」といわれ、励みになったといいます。このテーマについては、それまでこのプロジェクトで取り上げる高校生がいなかったのので、「考える機会を増やすことはできたのではないか」と感じています。2年になった今年もまた、引き続き同じテーマを追求するそうです。「保護動物を引き取る人を増やすために、ペットのケーキなどをつくって、引き取った人と、引き取りたいけど悩んでいる人に交流を深めてもらってはどうか、という案は出ています」

まさに調理部の活動と合体したような企画。今年も忙しくなりそうです。さやかさんの成長ぶりを、母の絵美さんはこう語ります。「以前は引っ込み思案だったのに、自分のこともわりと話すようになりました。自信がついたのかもかもしれません。将来は、自分のことより誰かのために尽くせるような人になってほしい。いまでもそういうところがあるので、看護師を目指すのはそんな理由もあるのかな」

もの静かな印象ですが、社会としっかり向き合おうとするさやかさん。看護師という目標も掲げ、着実に前進しています。

奨学生のいま

震災のとき幼稚園や小学1年生だった子どもたちは、この9年で高校生に。新型コロナウイルス感染症対策のため、今年はリモート取材となりましたが、画面の向こうの奨学生たちは、充実した高校生活や将来の夢について生き生きと語ってくれました。

※奨学生や家族の名前は仮名です。学年は取材当時(2020年8～9月)のものです。

高校には新しいことが いっぱいある!

藤島 新さん(仮名)

宮城県東松島市 高校2年生

「クラスには気の合う
友だちが結構います」

たった5人の空手部だけ

5歳のころから空手をやっているという藤島新さん。ひとつ上の兄と一緒に習い始めて以来、ずっと続けています。初段で黒帯となったのは小学5年生。いま通っている高校を選んだのも、空手部が強いという理由からでした。「今年、専攻が決まったのですが、長期の航海実習などがない生物環境類型を選びました。それも、県の新人戦や高校総体など、空手の大会を優先させたかったからです」

1年生の新人戦では団体戦で優勝。今年は、新型コロナの影響により高校総体は無観客の代替大会に。その団体戦でも見事、決勝戦まで進みました。次の目標は、もちろん2年続けての新人戦での優勝です。

「空手部の部員はわずか5人で、全員が2年生。団体戦に出られるギリギリの人数ですが、チームワークがいいから試合でも頼もしいです」

コロナで3月から休校となっていた期間、さすがに部活は休みでしたが、体力維持のために友だちとランニングをしていたとか。高校生活はまさに空手一色。一方で、6月から再開された授業もかなりバラエティに富んでいます。

「先生が魚市場から魚や貝を買ってきて、皆でさばいたり食べたりする実習もあるんですよ。ほかに面白い授業はダイビング。この冬、修学旅行で沖縄に行く予定なので、

海でダイビング体験できるのがすごく楽しみ。ただ、コロナの影響で場所が変わるかもしれませんけど…」

生徒会では校則の 改訂にチャレンジ

「高校では新しいことがいっぱいある」と目を輝かせる新さん。授業も部活も

一生懸命な上に、2年からは生徒会副会長を務めています。いまは校則について取り組んでいるとか。例えば、ソックスの長さが指定されているのを、短いスニーカーソックスでもいいように。また、髪型についても、もう少し自由にできないかと検討しています。

「生徒が過ごしやすくなるよう、学校のルールを変えたいんです。友だち皆から期待されています(笑)」

奨学金は空手部の活動にも活用

休日には朝早く起きて、地元の友だちと自転車に乗り、海へ行ったり山でカブトムシやクワガタを探したりすることも。高校がバラバラになった中学時代からの友だちとも、連絡を取り合っているそうです。

のびのびと高校生活をおくっている新さんですが、そろそろ将来についても考えています。なりたい職業は警察官。空手部の先輩らが警察官への道を進み、ともに空手を続けてきた兄からも背中を押されました。そのため公務員試験の勉強をする一方で、高校では幅広い資格を取るつもりです。

「ダイビングや潜水士の資格。あとは溶接やフォークリフトの免許など、取れるだけ取ろうと思っています」

東日本大震災のとき、新さんは小学1年生。自宅は海からだいぶ離れていたものの、母の里美さんが急いで家に戻ると、海の手前に広がる松林が見たこともないような光景になっていたそうです。

「それが多分、津波だったんだと思います。皆で慌てて逃げたので助かりましたが、亡くなった方は大勢います。いまでも大変な方はもっといらっしゃると思いますが、部活にも結構お金がかかるので、このような奨学金をいただけて本当に感謝しています」

奨学金は、空手部の道着やジャージ、遠征費などにも活用されているとか。授業も部活も生徒会も頑張る新さんの、充実した高校生活はまだまだ続きます。



空手部の練習は毎日。黒帯をきりと締めて



気仙沼に残って 社会に恩返ししたい

萩本 沙織さん(仮名)

宮城県気仙沼市 高校2年生

「体育は苦手ですが、
ほかはどの授業も楽しい」



看護師への夢が広がって

2020年の春、新型コロナの影響で、萩本沙織さんが通う高校は3ヵ月ほど休校に。家庭学習のかたわら、沙織さんが調べていたのは進路の情報です。目指す職業は看護師。東日本大震災を経験し、また、今年はコロナで看護師不足というニュースを聞くにつけ、社会の役に立ちたいと看護師を目指すようになりました。そして、専門学校について調べるうちに、看護師の資格があれば、病院だけでなく高齢者施設や幼稚園、保育所などでも働けることがわかってきました。「それで、ますます看護師っていいなと思うように。気仙沼はお年寄りが増えていきますし」

沙織さんの姉も同じ高校の卒業生です。普通科などでは体験できない授業が多いと知って、同じ高校を志望しました。専攻は食品開発類型で、調理実習をしたり食品の成分について学んだりします。いまは、地元の菓子店と協力して商品開発をしているそうです。「私のグループでは、酒粕ミルクパイサンドというのを考えました。まだ商品化されるかどうかわかりませんが、試作ではおいしかったです(笑)。このほか食品製造の授業では、サンマの缶詰を自分たちで製造して販売するので、いまから楽しみです」

初めて体験する実習が多く、新鮮な気持ちで高校生活をおくる沙織さん。部活はボランティア部で、児童館を手伝ったり、障害のある子どもと遊んだり、子ども食堂や高齢者施設でもお手伝いをするそうです。「私は人と関わるのが好きで、小さい子どもも好き。いろ



母校の中学校の校庭で。中学時代は吹奏楽部でテナーサックスを吹いていた

んな人と交流できるので楽しいし、やりがいがあります」

2年生から部長を務めています。今年はコロナでなかなか出かけられません。そんな中、生徒会の提案でタオルをたくさん集めて雑巾を縫い、水害の被災地に送ったそうです。

ダンスが世界を変えてくれた

今年、沙織さんにとっていちばん楽しかった思い出。それは、文化祭でダンスを踊ったことです。部活とは別に、仲のいい友だちと一緒に練習を重ねてきました。いろいろな曲をミックスして、10分間ほどのダンスにまとめて披露したそうです。「見た人たちに『すごいね』といってもらえて嬉しかった。これからも続けていきたいです」

ダンスを始めたのは小学5年生のとき。小学1年で震災に遭って以来、沙織さんは住まいも学校も転々としてきました。なかなか友だちができず悩んだ時期もあったといいます。そんな中、出会ったのがダンスでした。母の真琴さんは振り返ります。「震災で自宅は被災し、小学校は津波で廃校に。それで学校を移ったのですが、瓦礫だらけで通学できず…。また別の学校に移ると、沙織は泣きながら『行きたくない』と。ようやく落ち着いたのがいまの地区でした」

やがて、地元でできたダンス教室が、寂しかった沙織さんの世界を変えてくれました。「ダンスは唯一楽しかった。当時は各地の被災地でイベントがあったので、いろいろなところで発表できたり、励みにもなりました」

ダンス教室は中学2年で終了しましたが、高校で新しい仲間もでき、沙織さんにとってダンスはいま大切な時間となっています。

幼い娘3人を抱えて「震災後の9年はあっという間だった」という真琴さんは、そんな沙織さんをずっと見守ってきました。

「私は家の事情で進学できなかったのが、娘たちには好きなところに進学させてあげたい。この奨学金に本当に助けられています。だから、社会の一員となったら、いただいたご支援に恩返しできる人になってほしいです」

かたわらで大きくうなづく沙織さん。地元への思いを聞かせてくれました。

「いま気仙沼では人がどんどん出て行っています。でも、私は地元の専門学校に行って、地元で看護師になりたい。ここに残って気仙沼を活性化できればいいなと思っています」

奨学生のいま

自分の頭で考えるから 高校の勉強が楽しい

山岸 未央さん(仮名)
宮城県仙台市 高校1年生

高校へは地下鉄に乗って。
私服通学も「楽しいです!」。
仙台市の荒浜海岸で



自由な校風の中で学ぶ

石巻市で生まれ育った山岸未央さんが、仙台市の高校を選んだのは、進学校というほかに、新しい場所で新しい人たちと関わってみたかったから。コロナの影響で、授業が始まるまでの約2ヵ月は自宅待機。その間、学校から課題がたくさん送られてきたそうです。

「ただ問題を解くだけの課題ではなく、例えば物理では、紙を100枚くらいに切って行う確率の実験など。身近な素材が物理と関係していて面白いなと思いました」

授業が始まったのは6月。中学に比べて難しい内容もありますが、教科の中ではとくに国語に興味が出てきたとか。「国語の先生は、初めから結果をいうのではなく、皆の意見から文章の読み取り方を導いてくれます。まず自分の頭で考えさせてくれるので、そこが楽しい。家庭科の先生も、教科書にこだわらず、これからのライフスタイルに関わってくるような、生き方に役立つお話をしてくれます」

授業でのさまざまな刺激が、そのまま学ぶ楽しさに結びついているようです。もちろん、苦手な科目もあります。「数学です。高校に入って、訳のわからない関数のグラフが現れ始めて(笑)。中学のときはそうでもなかったんですけど」

未央さんの通う高校は、スーパーサイエンスハイスクール※に指定され、その活動もすでに始まっています。未央さんが所属する体育系の保体ゼミでは、音楽を聴くことで運動能力は向上するのか調べました。

「自分たちが実験台になり、アップテンポな曲とゆっくりした曲を聴いて50m走で記録を比較しました。結果は…、そんなに変わりませんでした(笑)」

自由な校風で、制服もなく、この高校で学べてよかったといいます。将来は大学に進学して、教員とは別の分野から教育に関わりたいという思いも。

「ただ、これから何に興味が出てくるかわかりません。高校生活でいろいろ見つけていけたらいいなと思っています」

文化祭で書道パフォーマンスを披露

子どものころから書道や絵画が好きだったという未央さん。中学のときは総合文化部で水彩画などを描いて



高校の文化祭では書道部全員でひとつの作品をつくり上げた

いました。3年の文化祭では、部員全員で黒板アートを作成したそうです。また、高校では書道部に所属。8月末に開催された文化祭では、11人の部員全員で書道パフォーマンスを披露しました(写真)。

「女性シンガー Superflyの『Beautiful』という曲に合わせて、歌詞を切り取って部員それぞれが担当する文字を書きました。初めてのパフォーマンスは本当に楽しかったです」

未央さんが書道部でテーマにしている書体は「隷書」。文化祭が終わったいま、11月のコンクールに向けて練習を重ね、部活を引退するまで隷書を極めていくそうです。

皆で震災を乗り越えた小学校時代

いまは高校通学のため仙台に住む未央さんですが、心に残っているのは、やはり中学まで過ごした石巻。とくに小学校には思い出があるといいます。母の恵理子さんはこう語ります。

「小学校の入学直前に東日本大震災が起こったので、同年代の友だちや先生方とは、辛い時期をともに乗り越えてきた『戦友』という意識があるようです」

震災のとき、恵理子さんは、幼い未央さんと着の身着のまま裏山に避難。やがて雪が降り始め、日も暮れてきて冷え込み、途方に暮れていたそうです。そのとき、自分の乗ってきた車をヒーターで温め、車内でひと晩過ごさせてくれた人がいました。

「その方がいらいしやらなかったら、どうなっていたかわかりません。本当にありがたかったです。娘の年代は、小学校入学時の震災や高校進学時のコロナと、節目節目に大変なことが起こっています。でもそれらに負けずに、力強く自分の道を歩んでほしい」

震災のときに手を差し伸べてくれた人たち、ともに乗り越えてきた友だちや先生、そして、いつもそばにいてくれる家族の存在が、未央さんの「いま」につながっています。

※スーパーサイエンスハイスクール 先進的な理数系教育によって創造性豊かな人材育成を目指すため、文部科学省が指定し科学技術振興機構が支援する。

震災で生まれた思いを胸に まっすぐに夢を描く

斉藤 小夏さん(仮名)

岩手県陸前高田市 高校1年生

ソフトボール部の
守備はファースト。
「でも、打つのが好きです」



ソフトボールが大好き!

この春、高校へ進学した斉藤小夏さんにとって、中学の卒業式も高校の入学式も、コロナのため時間短縮による慌ただしいものでした。

「それでも、卒業式では友だちに『ありがとう』といえたり、高校の入学式では、その日のうちに友だちができました。会えない日が続くからちょっと不安でしたけど、私は友だちをつくるのが得意なんです(笑)」

休校中は勉強のほか、祖父母の家を訪ね、田んぼの手伝いもしたそうです。

「中学の部活が忙しくて、おじいちゃん、おばあちゃんになかなか会えなかったのが、2人とゆっくり過ごすことができて楽しかったです。田んぼもいい経験になりました」

そして、授業が再開した4月後半。待ちに待った高校生活が始まると同時に、小夏さんが入部したのはソフトボール部でした。小学校のころ野球をやっていたこともあって、野球が大好き。ただ、高校の野球部では女子はマネージャーしかできないため、ソフトボール部への入部となりました。もちろん、中学でも野球部に入りたかったのですが、そのとき小夏さんが選んだのは卓球部でした。

「兄が卓球をやっていたので、お下がりを使えばお金がかからないと思ったから。ラケットのほかユニフォームもお下がりでしかたけど、楽しかったです」

屈託なく笑う小夏さん。スポーツ万能で、卓球部ではキャプテンを務め、そのかたわら駅伝部でも活躍しました。そんな経緯もあり、高校でソフトボール部に入部したいまは、練習がとても楽しいといっています。

「最初は『野球をやっていたから大丈夫』と思ったけれど、野球とソフトボールは全然違うんですね。必死でルールを覚えて、ソフトボールが大好きになりました。先輩や同級生は面白い人ばかりで、チームワークもとてもいいです」

今年はコロナのため高校総体がなくなった代わりに、岩手県の交流試合があったとか。少しの差で負けてしまったけれど、3年生は悔いなくやり切れたのでは、と小夏さんはいいます。次は県でベスト8に、と目標を掲げてくれました。

助けてくれる人たちがいたから

東日本大震災が起こったのは、小夏さんが保育園にいたときです。ちょうどお昼寝の時間でしたが、そのときのことを小夏さんははっきり覚えているといっています。

「園長先生に起こされて、皆で高台に走りました。警察官の方が2人くらいで誘導してくれたのが、すごく心強かった。自分たちの命を救ってくれたと思っています」

小夏さんが母と兄の3人で住んでいたアパートも津波で流され、周囲は瓦礫の山に。小学校の6年間は仮設住宅で暮らし、3年前ようやく復興公営住宅に入居しました。「いま私がいるのは、助けてくれた大勢の人たちがいたおかげ。その人たちに恩返しをしたいので、小学生のときから警察官になるという夢を抱いています。警察官になったら、助けが必要なお年寄りや子どもたちを、今度は私が支援したい。そして、母に楽させてあげたいです」

震災前の高田の町の景色で、小夏さんが覚えていることはほとんどありません。ただ、高田松原の砂浜で遊んだ思い出は心に残っているといっています。風光明媚だった松原は津波ですっかり失われ、1本だけ残った「奇跡の一本松」も枯れてしまいました。しかし、いまはまたこの一帯を公園にする計画が進んでいます。

「中学生のとき、生徒全員で松の苗を植樹しました。その松がもう1m近くになっています」

小夏さんたちがそれぞれの道を歩み、60～70歳になる頃には、松原は遠くからでもわかる高さに成長しているということです。

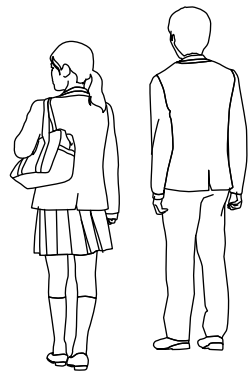


松の植樹が進む高田松原。「いまはまだこれくらい」

奨学生レポート

震災で被災された方々の生活再建は、この10年間、決して容易ではありませんでした。そんな中で成長してきた子どもたちの学校生活を支えてきたのが、ユネスコ協会就学支援奨学金です。今年も、未来へと大きく夢を描く奨学生たちの声をお届けします。

※昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策のためオンラインでの取材となりました。
※奨学生とご家族のお名前はすべて仮名です。



野球を通して 全国の人たちに 元気と感動を伝えたい

山村 浩司さん(仮名)
山形県山形市 高校1年生

山村浩司さんが野球を始めたのは小学1年生のとき。以来、16歳になったいままで野球一色の毎日をおくってきました。岩手県山田町で生まれ育った浩司さんは、震災と津波によって住む家を失いました。そのため、しばらくは家族とともに高台にある祖父母の家で暮らし、やがて仮設住宅へ。そんな中、兄と一緒に町の少年野球クラブに入ったのが始まりです。中学では陸上部に入ったものの、クラブチームで硬式野球をやっていました。そして2021年、山形県にある野球の強豪校に進学。慣れない寮生活をおくりながら、授業と野球部との両立に頑張っています。「練習は相当きついですけど、仲間が声をかけてくれるから、『自分だけじゃない、仲間も苦しいから頑張っていこう』と思えるようになりました」

朝練と放課後の練習は毎日、土日も試合や練習があるという厳しい日々。それでも、お互いに高め合える仲間がいるから野球が楽しいといいます。

浩司さんが専攻している体育科では、体育の授業だけでなく、人間の体について学ぶスポーツ概論をはじめ、パソコンを使う授業などがあります。苦手な数学も含めて、



守備はショート。陸上競技も好きで、走りの速さが野球に役立っている



「将来は野球のトレーナーか指導者になりたいです」

部活と同じように勉強をしっかりとやっていると話してくれました。

甲子園へかける思いとは

浩司さんの高校は、過去に4回も全国高等学校野球選手権大会に出場した実績があります。浩司さんの目標も、もちろん甲子園に出場すること。その目標には、心に秘めた思いがありました。

「全国の人たちに、野球を通して感謝の気持ちや感動を伝えられるようなプレーをしたいです。そして、東北から、被災地だけでなく全国を元気づけたいと思っています」

寮生活での楽しみは、と尋ねると「洗濯物をたたむこと」という意外なこたえが返ってきました。日々、汗と土で汚れるユニフォームを洗濯し、それを自らたたむのが新鮮だったようです。休日に友だちと遊びに行きたいわけでもない。野球ができることが、ただ嬉しいという浩司さん。「いま野球ができるのは、寄付してくださった皆さまのおかげです。そのご恩を、自分は野球でしか返せないと思っています。だから、必ず甲子園に行って、必ず日本一になって、必ずご恩を返していきたいです」

夢は、野球部を引退した後も、野球に関わる仕事に就くこと。そして、野球人口を増やしていくこと。野球ひと筋の青春が続きます。

航海実習を経たことで 海での仕事が目標に

森下 麻由さん(仮名)
宮城県気仙沼市 高校2年生

森下麻由さんが通う高校には海洋関係のクラスがあり、麻由さんはその2年生。秋には40日間もの航海実習で小笠原まで行ってきたそうです。航海では同級生たちと、延縄で獲ったマグロの尻尾に穴を開けて縄を通したり、皆の食事をつくったり、夜中には3時間交代で見張りをしたりと、さまざまな作業に取り組みました。

「大変なことも多かったけれど、同級生と40日間も一緒にいるのが楽しくて、航海が終わったときは寂しかったです。皆で頑張ったという感じで、達成感がすごくありました」

長期航海という得難い体験を通して、麻由さんには将来の夢が見えてきたといいます。

「船で働きたくて、公務員になって調査船に乗りたいと思うようになりました」

魚の状態を調べたり、水質調査をしたりというのが調査船での仕事。それに近いことを実習で経験し、興味が湧いたのだといいます。目標ができたことで、勉強にも張り合いが出てきました。3年生になったら、小型船舶やダイビングの免許を取るつもりだとか。一緒に勉強を頑張る友だちもいて、学校生活がとても楽しいと話してくれました。

ゼロからのスタートだったけれど

震災が起こったのは、麻由さんが幼稚園を卒園間近のころ。2人の弟と一緒に、母の菜穂子さんが運転する車で家へ帰る途中のことでした。車が渋滞し、「(津波が来たら)このままでは流される」と咄嗟の母の判断で、観光物産施設の



「海の近くで育ったから、船での仕事は身近に感じています」

屋上駐車場へ。

「そのときのことは鮮明に覚えています。屋上の小部屋に知り合いがいて、おにぎりをもらいました。何が起こっているのかわからず、大人の人たちが泣いていて、小部屋から出たら雪が降っていて寒くて…。弟たちが小さかったので、なぜか強がって『泣けないな』と我慢していました」

もらったおにぎりは結局、最後まで食べる気になれなかったそうです。

当時、麻由さんの家族が住んでいたのは、甚大な被害を受けた南三陸町。震災前、父の直光さんは、自宅の井戸に高圧洗浄機で麻由さんと弟たちの名前を書いてくれました。津波で流された家を震災後に訪ねると、井戸とその名前だけが残っていたそうです。思い出いっぱいの南三陸町の家は、麻由さんにとっていまも大切な場所です。

この10年は長かったけれど、震災ほど辛いことはなかったという麻由さん。

「震災後はゼロからのスタートでしたが、それでも、皆と同じように制服やジャージを着られるのは当たり前ではないと思います。この奨学金に協力してくださった皆さんに感謝しています」

「大好きな場所は震災まで住んでいた南三陸町の家。でもいまは、気仙沼が私のふるさとです」



かつての奨学生を訪ねて

本奨学金事業は2011年の震災直後に始まり、これまでに東北3県の約4000人が対象となりました。
かつての奨学生たちはその後、震災の記憶を乗り越え、どのように成長してきたのでしょうか。
なりたい自分に向かって、それぞれの道を歩む二人にお話を伺いました。

大好きな英語の楽しさを 子どもたちに伝えたい

兼澤 桃花さん
岩手県大槌町 小学校教員
奨学金受給期間 2011～2013年

岩手県大槌町で育った兼澤桃花さんは、2021年春に同町の小学校教員になったばかり。もともと勉強が好きで、中学生のころから学校の先生に憧れていたそうです。その思いがより強くなったのは、震災を経験したからかもしれません。
「先生方が私たち子どもを守ってくれたという思いがあります。通っていた学校が被災したため、他校に間借りしたり仮設校舎となったりしましたが、学ぶ機会をすぐに確保してくださって、すごいなあという気持ちが高まりました。それに、学校があると友だちに会えるし、一緒に遊べるし、おしゃべりもできる。被災後の混乱の中で、学校は楽しい場所として心の拠り所になっていました」
高校生になると、担任の先生のおかげで英語の面白さに目覚め、さらに、企業の東北支援プログラムでアメリカへの短期留学も体験。たくさんの刺激を受けて、英語教師を目指すようになります。大学院では英語教育を専攻しました。

「毎日、子どもたちの笑顔に会えることが元気の源です」



「高校1年のとき、企業の支援により3週間アメリカで学んだのが大きな刺激となりました」

「卒業後、中学や高校ではなく、小学校の教員を選んだのは、自分から進んで楽しく英語を学ぶ子どもたちを育てるには、小学校がいちばんだと思ったからです」
英語について自身が体験し、勉強してきたことを子どもたちに伝えられるのがとても楽しいといいます。英語を好きになる機会になればと、いまは年間を通してスピーチに力を入れているそうです。

どんなときにも笑顔で元気に

桃花さんが震災に遭ったのは中学2年生の終わり。日本ユネスコ協会連盟ではその年のうちに本奨学金事業を立ち上げ、桃花さんは1期目の奨学生となりました。
「自宅は大規模半壊でした。いま私が教師をしているのは、それでも勉強し続けられる環境があったから。それは、家族や先生、そして震災当時ご支援くださった皆さまのおかげです。いまの奨学生たちも、一度も会ったことがなくても、見守ってくれる方々がいらっしゃいます。だから勉強し続けてほしい。そうすることで、将来の選択肢や可能性がどんどん広がるんです」
そうやって自身も可能性を広げてきた桃花さん。教師になったいまも、一方的に教えるのではなく、子どもたちと一緒に考えることで、いろいろな見方を知りたいといいます。「教員1年目なので大変なこともあります。こんなに疲れていても、子どもに会えばなんだか元気になる。子どもにはパワーがあるんだと思います」
そんな子どもたちのために、いつも笑顔で元気いっぱいの教師を目指しています。



自動車整備士という 目標に向かって

渡邊 圭介さん
宮城県気仙沼市 専門学校1年生
奨学金受給期間 2018～2020年



「強く印象に残っている震災の記憶は、近くの川から黒い水がどんどん学校側に迫ってくるようすです」
と語る渡邊圭介さん、震災のときは小学2年生でした。全校生徒で高台に避難し、ものの5分か10分で目にした光景だそうです。まもなく津波は校舎に押し寄せました。「避難していなければ、津波に飲み込まれていました。家族も無事でしたが、気仙沼の鹿折にあった家は流されました」
親戚の家を転々とした後、一家は仮設住宅へ。そのまま圭介さんが中学3年生になるまで、家族4人での仮設暮らしが続きました。その後、鹿折の土地に盛り土をして家を建て、ようやく自分の部屋ができたといいます。そのころ奨学生となった圭介さん、奨学金は高校の入学資金や、入部したバスケットボール部のユニフォーム、バッシュなどに活用されたそうです。
「奨学金にご協力いただいた皆さまには、どんな形でもいいから恩返しをしたいと思います。いまの奨学生の方々にも、感謝の気持ちを忘れてほしくないです。そして、自分の目標に向かって頑張ってほしい」



地元、鹿折は津波の後、火災が広がり壊滅的な被害を受けた。その記憶を留めるために建立された「津波記憶石」の前で。

いつか乗りたいスポーツカーがある

圭介さんはいま、自動車整備士を目指して専門学校で学んでいます。もともと車が好きで、車に関係する仕事に就きたいと思っていました。その思いが、整備士というはっきりした目標となったのは、父と車のディーラーを訪ねたときでした。
「整備士さんが着ていたつなぎの右腕に、国家1級整備士とトヨタ1級整備士という2つのワッペンが見えたんです。その方はお客さんへの対応がていねいで、仕事の手際もよく、自分もこんな整備士になりたいと思いました」
1級整備士の資格は確かな知識と技術力の証です。圭介さんには、その2つのワッペンが誇らしく見えたのでしょう。来年、まずは国家2級整備士の資格を取り、整備士となるのが第一の目標。そして働きながら技術を磨き、1級の資格を取りたいと考えています。
「自分は勉強があまり得意でなかったのですが、整備士を目指すといったとき、友だちに『勉強ができないとダメだよ』とよくいわれました。だから、勉強が苦手でも、目標を持って努力すれば1級整備士の資格が取れるんだ、ということを実現したいです」
整備士になっても、気仙沼で働きたいという圭介さん。少しでも街が活気づき、地元の人たちの手助けになれば、というのがその理由です。そして、整備士を目指したときからずっと憧れていたスポーツカー「トヨタ86」に乗るのが夢、と語ってくれました。



「自分は高校を卒業できて、いまは整備士を目指しています。いろんな人たちのおかげでここまで来れたんだと思います」